

釋本願是なり。

(教行證文類)

●夫れ南無阿彌陀佛と申は、いかやうなることろぞなれば、まづ南無といふ二字は歸命と發願回向との二のことろなり、まづ南無といふは願なり、阿彌陀佛といふは行なり、されば雜行雜善をなげすて、專修專念に彌陀如來をたのみたてまつりてたすけたまへとおもふ歸命の一念をこるとき、かたじけなくも遍照の光明をはなちて行者を攝取したまふなり、このことろすなはち阿彌陀佛の四字の字のことろなり、又發願回向のことろなり。

(御文)

●されば南無阿彌陀佛の六字を善導釋して曰く、南無といふは歸命、またこれ發願回向の義なりといへり、其意いかんぞなれば、阿彌陀如來の因中に於て我等凡夫の往生の行をさだめ給ふとき、凡夫のなすところの回向は自力なるが故に成就しがたきによりて、阿彌陀如來の凡夫のために御辛勞ありて此回向を我等にあたへんがために回向成就したまひて一念南無と歸命するところにて、此回向を我等凡夫にあたへましますなり、故に凡夫の方

よりなまぬ廻向なるが故に、これをもて如來の廻向をば行者のかたよりは不廻向とは申なり、此いはれあるがゆへに、南無の二字は歸命のこゝろなり、又發願廻向のこゝろなり、このいはれなるがゆへに、南無と歸命する衆生を、かならず攝取してすてたまはざるが故に、南無阿彌陀佛とは申すなり。

(御文)

●南無と衆生が彌陀に歸命すれば、阿彌陀佛のその衆生をよくしろしめして、萬善萬行恒沙の功德をさづけたまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛

即是其行といふこゝろなり。

(御文)

第三項 機法一體

●南無と言は歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり、阿彌陀佛と言は即是れ其行なり、此義をもての故に必き往生を得。

(支義分)

●信行はなれど、機法是れ一なり。

(六要鈔會本)

●思案の頂上と申べきは、彌陀如來の五劫思惟の本願にすぎたることはなし、此御思案の道理に同心せば佛になるべし、同心とて別になし、機法一體の道理なりと。

(御一代記聞書)

名號には機法一體の謂あり

●されば南無阿彌陀佛の六字のいはれを、よくこゝろえわけたるをもて信心決定の體とす、しかれば南無の二字は衆生の阿彌陀佛を信ぜる機なり、次に阿彌陀佛といふ四字の字のいはれは、彌陀如來の衆生をたすけたまへる法なりこのゆへに、機法一體の南無阿彌陀佛といへるはこのこゝろなり。

(御文)

●このゆへに南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけまします法とが、一體になるところをよとして、機法一體の南無阿彌陀佛とはまうすなり。(御文)

●されば彌陀をたのみ機を阿彌陀佛のたすけたまふ法なるがゆへに、これを機法一體の南無阿彌陀佛といへるはこのこゝろなり。

(御文)

第四項

佛の勅命

●般舟經の言によるに、時に跋陀和菩薩あり、此國土に於て阿彌陀佛ましますと聞て、しばらく念を係く、此念によるが故に阿彌陀佛を見たてまつる既に佛を見たてまつることをばりて、すなはち從ふて啓問す、當に何の法を行じてか彼國に生ぜることを得ん、その時に阿彌陀佛この菩薩に語ての

佛の勅命は
即ち名號の
謂を示す

たまはく、我國に來生せんとおもはば、常に我名を念じて休息することなかれ、かくのごとくして我國土に來生することを得ん。(安樂集)

●彌陀空に在て立せることは、たゞし心を廻して正念にして、我が國に生せんと願せれば、立どころに即ち生ることを得ることを明す。(定善義)

●法性は平等なりと雖も亦假有をはなれど、彌陀佛の言まふ如し、諸法の性は一切空無我なりと通達すれども、専ら淨佛土を求めて必是の如きの刹を成せど。

(往生要集)

●阿彌陀佛のたまはく、我國に來生せんと欲はん者は、當に我を念ぜべし、しばぐ常にまさに専ら念ぜべし、休息あることなかれ、是の如んば我國に來生することを得ん。(往生要集)

●蓮如上人法敬に對せられ仰られ候、今此彌陀をたのめといふことを、御教へ候人をしりたるかと仰られ候、願誓存せせと申され候、蓮如上人仰られ候、此事ををしふる人は阿彌陀如來にて候阿彌陀如來の我をたのめとの御おしへにて候由仰られ候。(御一代記開書)

●東の岸に忽ちに人の勸むる聲を聞く、仁者たゞ決定して此道を尋ねて行け、必き死の難なからん、若し住せば即ち死せん、又西の岸の上に人ありて喚んで言く、汝一心正念にして直に來れ、我よく汝をまもらん。

(散善義)

●阿彌陀如來のおほせられけるやうは、末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくども、われを一心にたのまん衆生をば、かならざるくふべしとおほせられたり。

(御文)

第五項

名號の徳

名號には無量の徳具足す

●十方恒沙の諸佛如來皆共に無量壽佛の威神功德の不可思議なることを讚嘆したまふ。

(無量壽經)

●名號は是れ萬徳の歸するところなり、然れば即ち彌陀一佛の所有の、四智三身、十力、四無畏等の一切の内證の功德、相好光明、說法利生等の一切の外用の功德、皆ことごとく阿彌陀佛の名號の中に攝在す。

(選擇集)

●佛名は乃ち是れ功を積んで薰修す、其萬徳をとるに總べて四字に彰はる、是の故に之を稱するに益をうることを淺きにあらざり。

(教行證文類)

●まことに如來の功德おほしといへども、光明壽命の功德にはすぎざ、この二種の功德のなかに萬徳ことごとくそなはれり、かの萬徳しかしながら名號の一行にこもれるなり。
(顯名鈔)

●一行一心にこれを信行すれば、かの名號は圓融至徳の嘉號、法身同體の功德なるゆへに、しらざるに法性の深奥を觀達する義あり。
(顯名鈔)

●さて南無阿彌陀佛といへる行體には、一切の諸神諸佛菩薩も、そのほか萬善萬行も、ことごとくこもるなこもれるがゆへに、なにの不足あつてか諸行諸

善にこころをこむべきや、すでに南無阿彌陀佛といへる名號は、萬善萬行の總體なればいよくたのもしきなり
(御文)

●それ南無阿彌陀佛とまうす文字は、そのかきわづかに六字なれば、さのみ功能のあるべきともおぼえざるに、この六字の名號のうちには、無上甚深の功德利益の廣大なること、さらにそのきはまりなきものなり。
(御文)

●名號不思議の海水は、逆謗の屍骸もどまらざ、衆惡の萬川歸しぬれば、功德のうしほに一味なり。

(和讃)

●名號はもろくの善本を攝し、もろくの徳本を具せり、衆行の根本萬善の總体なり。

(教行信證大意)

●萬行圓備の嘉號は、障を消し疑を除く。

(教行證文類)

念佛の徳

●稱名は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満つ。

(教行證文類)

●我彌陀は名を以て物を攝す、是を以て耳に聞き口に誦へば、無邊の聖徳識心に攪入し、永く佛種と

なり、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲證す。

(教行證文類)

●一形惡をつくれども、專精に心をかけしめて、つねに念佛せしむれば、諸障自然にのぞこりぬ。

(和讃)

●利劔は即ちこれ彌陀の號なり、一聲稱念するに罪皆除かる。

(觀念法門)

●今もし我が心口をもて、一佛の嘉號を稱念すれば則ち因より果に至るまで、無量の功德具足せざることなし。

(教行證文類)

● 千年のあひだたてこめてくらからんところに、日の光しばらく至らば、久しかりつる闇即ち去りて明なることをうべし、くらきことは千年なり、日の光はわづかなる時の程なればとて、そのやみ去らざることをあらんや、念佛もまたかくのごとし、衆生無始よりこのかた、無明のやみにおははれて罪障を身にそなへたることは千年のやみのごとししかれども一稱一念の功は、かの片時の日の光のごとくにて、衆生の癡闇をのぞき往生をえしむるなり。

(顯名鈔)

● 人ありて毒の箭にいらるるとき、箭ふかく毒あつからんに、もし一たび滅除薬のつゝみのこえをさけば、毒の箭すなはちのぞくる、滅除薬のつゝみといふは、いくさの陣にむかふとき、毒をぬく薬をもつゝみにぬりてもつなり、かのつゝみのこえをさくつゝみども、毒の箭ふかくいりたればとて、ぬけしといふことあらんや、毒の箭といふは衆生の罪惡なり、かの鼓は彌陀の名號なり、無始の三毒の箭ふかく身の中にいりたりといふども、名號滅罪のつゝみをさけば、罪毒すなはちのぞこ

るなり。

(顯名鈔)

●めぐり十圍じゅうゐあらん太き繩おほなはを千人せんじんどりつきてひきくらんとせんにさるべからば、しかるに幼きもの一人つるぎをもてこれをさらば、即ち二ふたつにならんがことし、煩惱業繫ぼんごうごふけのさづなつよくむすばれて、たやすくされかたさかゆへに、かのなはに千人せんじんどりつきたるがごとく、諸善諸行しよぜんしよぎやうをもて不善ふぜんの心こころのうへに行いれば、そのちからかなはざれども、一念名號ねんみやくうの利劍りけんをもてこれをさるに、さらになれどといふことなし。

(顯名鈔)

●あしなえたるものも舟ふねにのりぬれば、舟ふねの力ちからにより風かぜの縁ゆゑによりて、一日いちにちに數十里すじかりのみちをすぐ、足早あしはやき人の力ちからをばげましてゆくにまされり、行業ぎやうごふのあしおれたるものも、智慧ちゑの眼まなこしむたるものも大願だいがんの舟ふねに乗のりしぬれば、頓とんに生死しやうじの大海たいかいをわたりて、自力じりきのもろくの行業ぎやうごふをばげむひとよりも、はやく菩提ぼだいの岸きしにいたるがゆへに、念佛ねんぶつは頓教とんけうなり。

(顯名鈔)

●慈恩大師じおんだいしの釋しやくにいばく、諸佛しよぶつの願行がんぎやうこの果くわの名なを成じやうす、たゞよくみなを念ねんせれば、つぶさにもろ

くの徳をかぬと。おほよそ諸宗の人師の念佛をほめ。西方をすゝむることわげてかどふべからせしげさがゆへにこれを略す、ゆめく念佛の功徳をおとしめおもふことなかれ、然るに人常におもへらく、つたなきものゝ行する法なれば念佛の功徳はおとるべし、尊き人の修する教なれば諸教はまざるべしとおもへり、その義しからせ、下根のものゝすくはるべき法なるがゆへに、ことに最上の法とはしらるゝなり、ゆへいかなとなれば、薬を以て病を治するに、かるき病をばかるき薬をも

てつくるひ、重き病をば重き薬をもていやす、病を知りて薬を施すこれを良醫となづく、如來はすなはち良醫のごとし、機をかみて法をあたへたまふ、しかるに上根の機には諸行をさづけ、下根の機には念佛をすゝむ、これすなはち戒行も全く智慧もあらん人は、たどへば病淺き人のごとし、かゝらん人をば諸行の力にて以てたすけつべし、智慧もなく悪業ふかき末世の凡夫は、たどへば病重き者のごとし、これをば彌陀の名號の力にあらせしてはすくふべきにあらせ、かるがゆへに罪惡

の衆生のたすかる法どきくに、法の力の勝れたる
はどは殊に知らるゝなり、されば選擇集のなかに
極悪最下の人のために極善最上の法をどく、例せ
ばかの無明淵源のやまひは、中道府藏のくすりに
あらざれば、すなはち治することあたはざるがど
とし、今この五逆は重病の淵源なり、またこの念
佛は靈藥の府藏なり、この藥にあらざれば何ぞこの
病を治せんといへるはこのこゝろなり。(持名鈔)

第六項

往生の正因

彼無碍光如來の名號は、能く衆生の一切の無明を

名號は衆生
の往生の正
因なり

破し、能く衆生の一切の志願をみてたまふ。

(往生論註)

- 稱名は即ち是最勝眞妙の正業なり、正業は即ちこ
れ念佛なり、念佛は即ちこれ南無阿彌陀佛なり、
南無阿彌陀佛は即ち是れ正念なり。(教行證文類)
- 本願の名號は正定の業なり。(正信念佛偈)
- 言阿彌陀佛者といふは、即是其行どのたまへり
即是其行はこれすなはち、法藏菩薩の選擇の本
願なり、安養淨土の正定の業因なりと、のたま
へることろなり。(尊號眞像銘文)

●本願の名號は能生する因なり、能生の因といふはすなはちこれ父なり。

(未燈鈔)

●南無阿彌陀佛といへる行体は往生の正業なり。

(持名鈔)

●すでに南無阿彌陀佛をもて正定の業となづく、正定の業といふは、まさしくさだまるたねといふことなり。

(眞要鈔)

●名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしくさたまるゆへなり。

(執持鈔)

●念佛をもて本願とし、名號をもて正因とす。

(歩船鈔)

●されば名號を往生の正因なりとふかく信じて、一向に稱するよりほかは、またしるべきところもなし。

(顯名鈔)

●本願の名號は正定業といふは、第十七の願のこゝろなり、十方の諸佛にわが名をほめられんとかかひましまして、すでにその願成就したまへるすがたは、すなはちいまの本願の名號の体なり、これすなはちわれらが往生をどくべき行体なりと

(正信偈大意)

第七項

光明と名號

彌陀は光明
と名號を
以て十方衆
生を攝化し
たまふ

しるべし。

●諸佛の所証は平等にして是れ一なれども、若し願行を以て來り收むるに因縁なきにあらざ、然に彌陀世尊本と深重の誓願を發す、光明名號を以て十方を攝化したまふ、たゞ信心をして求念せしむれば、上一形をつくし。下十聲一聲等に至る迄佛の願力をもて往生を得易し。(往生禮讚)

●良に知りぬ徳號の慈父なくんば、能生の因縁けん、光明の悲母なくば所生の縁をむきなん、能

生因縁和合すべしと雖も、信心の業識に非ざば光明土に到ることなし、眞實信の業識これ乃ち内因とす、光明名號の父母これ即ち外縁とす、内外因縁和合して報土の眞身を得證す。(教行證文類)

●光明名號顯因縁といふは、彌陀如來の四十八願のなかに、第十二の願は、わかひかりきはなからんとちかひたまへり、これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり、かの願すでに成就して、あまねく無碍のひかりをもて、十方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にてらしめます

さればこの光の縁にあふ衆生、やうやく無明の昏
 闇うすくなりて、宿善のたねさすとき、またし
 く報土にむさるべき、第十八の念佛往生の願因の
 名號をさくなり、しかれば名號執持することさら
 に自力にあらざ、ひとへに光明にもよはさるこ
 によりてなり、このゆへに光明の縁にさざれ
 て、名號の因はあらはるるといふことろなり。

(正信偈大意)

しかるに宿善開發する機のあるしには、善知識に
 あふて開悟せらるるとき、一念疑惑を生ぜざるな

り、その疑惑を生ぜざることば光明の縁にあふ
 ゆへなり、もし光明の縁もよはさざれば、報土往
 生の真因たる名號の因をうべからず、いふことろ
 は十方世界を照耀する無碍光遍照の、明朗なるに
 てらされて、無明沈没の煩惑漸々にとらけて、涅
 槃の真因たる信心の根芽わづかにさすとき、報
 土得生の定聚の位に住す、すなはちこの位を光明
 遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とけり、また光
 明寺の御釋には光明名號をもて十方を攝化し、
 但だ信心をして求念せしむとものためへり、しか

れば往生の信心のさだまることは、われらか智分
にあらざ、光明の縁にもよほしそだてられて、
名號信知の報土の因をうとしるべしとなり、これ
を他方といふなり。
(口傳鈔)

宗師は光明名號をもて十方を攝化し、但た信心
をして求念せしむとのたまへり、但た信心をし
て求念せしむといふは、光明と名號と父母の
とくにて、子をそだてはぐむべしといへども、
子となりていづくべきたねなきには、ちよはと
なづくべきものなし、子のあるとき、それがため

にちよとらひ、はといふ號あり、それが如くに
光明を母にたとへ、名號を父にたとへて、光明
の母名號の父といふことも、報土にまさしく生る
べき信心のたねなくばあるべからざ、しかれば信
心をおこして往生を求願するとき、名號もとなへ
られ、光明もこれを攝取するなり、されば名號
につきて信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取
不捨のちかひ成ぜべからざ、彌陀如來の攝取不捨
の御ちかひなくば、また行者の往生淨土のねがひ
なにくよりてか成せん、されば本願や名號、名

號ごうや本願ほんぐわん、本願ほんぐわんや行者ぎやうじや、行者ぎやうじやや本願ほんぐわんといふこのいはれなり
(執持鈔)

●無碍光如來むがいくわうにょらいの名號なごうと、かの光明智相くわうみやうちさうとは無明長夜むみやうちやうの闇やみを破はし、衆生しゆじやうの志願しごわんをみてたまふ。(和讃)

第八項 誓願の名號

誓願せいぐわんと名號なごうとは同一なり

●誓願せいぐわん名號なごうとまふしてかはりたること候さふらはせ、誓願せいぐわんをはなれたる名號なごうも候さふらはせ、名號なごうをはなれたる誓願せいぐわんも候さふらはず候さふら、かく申まう候さふらはからひにて候さふらなり、ただ誓願せいぐわんを不思議ふしぎと信じしんじ、また名號なごうを不思議ふしぎと一念いちねん信じしんじとなへつるうへは何條なにじやうわがはからひ

をいたすへき。

(末燈鈔)

●一文不通いちもんつうのどもがらの念佛ねんぶつ申まうすにあふて、汝なんぢは誓願せいぐわん不思議ふしぎを信しんじて念佛ねんぶつをまうすか、名號なごう不思議ふしぎを信しんじるかど、いひおどろかして、二ふたつの不思議ふしぎと子細こさいをも分明ぶんめいにいひひらかせして、人ひとの心こころを惑まどはすこと、この條じやうかへすくも、心こころを留とどめておもひわくべきことなり、これは誓願せいぐわんの不思議ふしぎをむねと信しんじてたてまつれば、名號なごうの不思議ふしぎも具足ぐそくして、誓願せいぐわん名號なごうの不思議ふしぎ一ひとにして、さらにことなることなきなり。
(歎異鈔)

第三章

衆生

第一節 機相

第一項 無常

森羅萬象無常ならざるはなし

一切の有爲法は夢幻泡影の如く、露の如く亦電の如し。
(往生要集)

諸行は無常にして、是れ生滅の法なり、生滅滅し已りぬれば、寂滅なるを樂となす、雪山の大士は全身をすて、此偈を得たり、行者よく思念せよ、之をゆるかせにすることを得ざれ。
(往生要集)

人生は無常なり

生死の常の道轉た相鬪き、或は父は子を哭し、或は子を父を哭す、兄弟夫婦かはるく相哭泣す、顛倒上下して無常の根本なり、皆過去にうく、常に保つべからず。
(無量壽經)

愛欲榮華常に保つべからず、皆當に別離すべし、樂むべきものなし。
(無量壽經)

無常迅速にして停り難し。
(法華讚)

涅槃經に云く、人の命は停まらざると、山水よりも過ぎたり、今日は存すと雖も明けば亦保ち難し如何んぞ心を縦まにし惡法に住せしめんや。

●此日己に過す、命即ちかけぬ、小水の魚の如し
 これ何の樂きことかあらん、摩耶經の偈に云く、
 譬へば梅陀羅の牛を駈て屠所に至に、歩々に死地
 に近くが如し、人の命も亦是の如し、設ひ長壽の
 業ありと雖も終に無常を免れず、富貴の報を感ぜ
 と雖も必き哀患の期あり。
 (往生要集)

●大經の偈に云が如し、一切の諸の世間に、生は皆
 死に歸し、壽命無量と雖もかならず終りつくるこ
 とあり、夫れ盛なるものは必き衰ふることあり、
 合會へば別離あり、壯年久しく停まらず、盛なる

色は病に侵され、命は死の爲めに吞まれ、法とし
 て常なるものあることなし、又罪業應報經の偈に
 云く、水渚常に滿てらば、火盛にして久しく燃え
 ば、日出で須臾にして没ぬ、月滿ちて已に復缺け
 ぬ、尊榮高貴者の無常の速なること是に過たり。
 (往生要集)

●法句譬喻經の偈に云が如し、空にも非ば、海中に
 も非ば、山石の間に入るにも非ば、地方處として
 脱れ止で、死を受けざるもの有ることなし、(空に
 のぼり、海に入り、巖に入る三人の因縁、經に廣

く説とくが如ごとし、當まさに知しるべし、諸餘しよゑの苦患くげん或あるは免まる者ものあり、無常むじやうの一事いちじは終ついに避さぐる所ところなし、須すく説とくの如ごとく修行しゆぎやうして常樂じやうらくの果くわを欣求こんぐすべし。(往生要集)

●止觀とくけんに云いが如ごとし、無常むじやうの殺鬼さつぎ豪賢ごうけんを擇ねらばせ、危脆きせいして堅かたからせ、たのみたのむ可べきこと難かたし、云何いかんぞ安然あんねんとして百歲ひやくさいを規望きぼうせん、四方しほうに馳求ちきせうして財積せきしうれん聚斂くあつむるに未だ足たらせ、にはかに長往しせは、所有しよゆうの財貨さいわ徒たに他有たいうとなり、冥々めいぐとして獨り逝ひく、誰たれか是非ぜいひを訪たづねらはん、もし無常むじやう暴水ばうすい猛風まうふう掣せ電づまよりも過すぎて、山海さんかい空くうしくついに逃のがれ避さぐると

ころなしと覺されば、是かくの如ごとく觀くわんじ已おほりに心大しんおほいに怖畏おそれして、眠ねりは席安せきやすからせ、食しょくを哺くわを甘あまんせせ、頭燃づねんを救すくふごとくして、以もつて出要しゆつようを求めよ。

(往生要集)

●つらくおもんみれば、輪王りんわう高貴こうきの位七寶くらむしつほうついに身みに従したがふことなく、釋天しやくてん寶象ほうしやうのあそび四苑よつこののなかくまなこに隔へだつる期きあり、仰あほひで六欲ろくよく四禪しぜんを思おもふに、三界さんがいのうちらうらやましかるべき所ところなし、伏ふして三惡さんあく四趣ししゆをうかがふに、六道ろくだうのあひださながら皆みな悲あはれを免まるべき所ところにあらせ、人間にんげん南浮なんぶの僅わずな

る壽、粟散邊國のいやしき果報なんぞ著樂をなす
 へさや、不死の薬を求めし秦皇漢武も空しく去り
 ぬ、ただ悲風の驪山杜陵の麓にむせぶあり、武勇
 の計に長せし樊噲張良も名をのみのこせり、
 未だ變遷有爲のあだを拒ぐ弓箭あることを聞かざ
 綺羅の三千もそらにおひたり、漢李唐楊の
 たはやかなりし姿も一聚の塵となりぬ、付法藏の
 賢聖もことごとくかくれぬ、有智高行の聖人もか
 たざらぬは無常の殺鬼なり、老少不定のさかひな
 れば、盛なる人も多くゆく、生者必滅のことばり

なれば、老ぬる人はまして止まらざ、鳥部山の煙
 峰にものぼり、麓にもたつ、我もいつか其數に入
 らん、あだし野の露あしたにもさへ、夕にも落つ
 誰とてもよそにやはおもふべき、後鳥羽の禪定上
 皇の、遠嶋の行宮にして、宸襟をいたましめ、浮
 生を觀じましくける御うちささみに、作らせた
 まひける無常講の式こそ、さしあたりたることは
 り、耳ぢかにて世にあはれにさこえ侍るめれ、そ
 の刺藻をみれば、或はさのふ已にうづんで涙を塚
 の下に拭ふもの、或は今夜送らんとして別を棺の

前まへになく人ひとあり、凡およそはかなきものは人の始はじめ中ちゆう終しゆう幻まぼろしのごとくなるは一期いちごの過すぐる程ほどなり、三界さんがい無む常じやうなり、古いにしへより未いまだ萬まんざい歳さいの人身にんしんあることをさかき、一生いちじゆうすぎやすし、今いまにありて誰たれか百年ひゃくねんの形体ぎやうたいを保たもつべきや、我われや先人さきひとや先さき、けふとも知らせ、あすともしらせ、おくれ先さきだつ人ひとはもとのしづく末すえの露つゆよりもしげしといへり、又また近頃ちかごろ智行ちぎやう名高なだかく聞きこゆる笠間かさまの解脱げだつ聖人しやうにんのかゝれたる語ことばも、世よにやさしく肝きもにそみて覺おぼゆ、その語ことばには、風葉かぜにあつはの身保みたまちがたく、草露くさつゆの命いのちさえやすし、南隣なんりんにも哭なみし、

北隣ほくりんにも哭なみす、人ひとを送おくる涙なみだ未いまだつきせ、山下さんげにもそび、原上げんじやうにもそふ、骨ほねを埋うむ土つちかはくことなし傷いたしき哉か、まのあたり言ことばを交まじへし芝蘭しらんの友とも、いさ止とりぬれば、遠とほくおくり、哀あはれなる哉か、正まさしくちぎりをむ結むすびし斷金だんきんのむつひ、魂たましひさりぬれば獨ひり悲かなむといへり、かやうのことはりは目の前まへに見みゆれば、人ひと毎ごとに知顔しりがほなれども、欲塵よくぢんに著ちやくし境界きやうがいにはださるゝならひなれば、凡夫ぼんぷとして驚おどろかざることばなかるべし、然しかれば坐禪ざぜん三昧さんまい經きやうには、今日こんにちこのことを營いみ、明日あすかのことをなさん、樂著らくちやくして苦くを

觀せざれば、死賊の到ることをさとりき、忽々として衆務をいとなめば、日夜のさることさとりきとていへり、かゝる無常のかなしみは淨土に非ざはのがれがたく、この有待のすがたは生死を離れまばいかで改めん。

(存覺法語)

● 靜におもんみれば、それ人間界の生をうくることは、まことに五戒を保てる功力によりてなり、これ大に稀なることぞかし、たゞし人界の生は僅に一旦の浮生なり、後生は永生の樂果なり、たゞひまた榮花にはこり、榮耀にあまるといふとも、盛

者必衰會者定離のならひなれば、久しく保つべきにあらず、たゞ五十年百年の間のことなり、それも老少不定とさくときは、まことにもてたのみすくなし。

(御文)

● 夫秋もさり春もさりて、年月ををくること、昨日もすぎ今日もすぎ、いつのまにかは年老のつもるらんども、覺へましらざりき、しかるにそのうちにさりども、或は花鳥風月の遊びにも交はりつらん、また歡樂苦痛の悲喜にもあひはんべりつらんなれども、いまにそれどもおもひいだすことにて

は一もなし、たゞ徒にあかし、いたづらにくらし
て、老の白髪となりはてぬる、身のありさまこそ
かなしけれ、されども今日までは、無常のはげし
き風にもさはれきて、我身あり顔の體をつら
く案差るに、たゞゆめの如し、まぼろしの如
し。
(御文)

●朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり、
すでに無常の風來りぬれば、即ち二の眼忽にと
ぢ、一のいき長くたえぬれば、紅顔むなく變じ
て、桃李のよそはひをうしなひぬるときは、六親

人身は不淨
なり

眷屬あつまりてなげきかなしめども、更にその甲
斐あるべからず、さてしもあるべきことならぬば
とて野外にをくりて、夜半のけぶりとなしはてぬ
れば、たゞ白骨のみぞのこれり、あはれといふも
中々おろかななり。
(御文)

第二項 人心

●不淨といふは、凡そ人の心中に三百六十の骨あり
て、節々相さへたり、是の如きの身は一切臭穢
にして自性殞爛せり、誰かまさに此に於て愛重し
憍慢せん。
(往生要集)

●此身亦爾なり、少より老に至るまで唯これ不淨なり、海水を傾けて濯ぐとも淨潔ならしむ可らば、外には端嚴の相を施すといへども、内には唯諸の不淨をつゝめること、猶し盡せる瓶に糞穢をいれたるが如し、故に禪經の偈に云く、身くさく不淨なりと知れども、愚者はまことに愛惜す、外に好き顔色をみて、内の不淨をみせ。 (往生要集)

●當に知るべし、此身始終不淨なり、所愛の男女皆亦是のどとし、誰の有智の者が更に樂著をなさん止觀に云く、未だ此相をみざるどきは愛染甚だ強

し。もし此を見已れば欲心すべてやみぬ、はるかに忍ぶに堪へば、糞を見ざるどきは猶能く飯をくらう、忽にくさき氣を聞つれば、即嘔吐くが如し。

(往生要集)

●不淨輪といふは、この身の汚穢にして淨潔ならざることをいふなり、これにつきて三種あり、種子不淨、自體不淨、究竟不淨なり、種子不淨といふは、この身は梅檀のたねよりも生ぜば、蓮華のくさよりもいでせ、中有の形子すて、業識を胎内にやどすはじめより、その種子またこれ不淨なり、

自體不淨といふは、三百六十の骨集まりて身形を
 成し、三萬六千のちすぢながれて氣命をたもつも
 五臟六腑みなこれ不淨なり、涕唾便痢一として清
 からき、たとひ海水をかたぶけてこれを洗ふとも
 自體の不淨をばきよむべからき、たとひ沈檀をた
 きてこれに薰ぎとも、本性の臭穢をあらたむべか
 らき、柳の眉緑なりといへども、その實體を觀せ
 るに耽著すべきにあらき、花の顔こまやかなり
 といへども、たゞこれ畫せるかめに糞穢をいれた
 るが如し、智行兼備のやむことなき聖人達も、か

りのいろにめで、行業を空しくすること、三國に
 そのためしおほし、肉身の不淨をば現量にも識知
 し、聖教の明文にむかふときは、一旦その道理を
 甘心することなきにあらざれども、無明の迷によ
 りて自の心を調伏せざること、欲界繫の煩惱の
 所爲力なきことなり、五欲を貪求すること相續し
 てこれ常なり、たとひ清心をおこせども、なをし
 水にぬがくがごとし、濁世の凡心は賢愚ともに、
 恐らくば甚くかはらきもやはんべるらん、究竟不
 淨といふは、二の眼忽にどぢ、一のいき長くた

えぬれば、日かきをふるまゝにその色を變じ、次第に相かはるに九相あり、然れども即ち野外に送りて、夜半のけふりとなしはてぬるには、九相の轉移をみせ、たゞ白骨の相のみ見れば、たしかに其あり様をみぬによりて、愚なる心に驚かぬなるべし、たましく郊原塚間をすぐるに、自から其相をみるときは、一念なれども忍びがたきものなり、紅顔そらに變じて桃李のよそほひをうしなひぬれば、忽に膨脹爛壞るゝ相となり、立髪身をはなれて荆棘の中にまつはれば、烏犬噉食の

三界安きことなし衆苦充滿す

こえのみあり、あるひは爪髪分散してこゝかしてにみてる所もあり、或は手足腐敗して東西にちれる所もあり、誠にこれ不淨の究竟する所、抑また有待の然らしむる所なり。
(存覺法語)

●今此娑婆世界はこれ惡業の所感、衆苦の本源なり
(往生要集)

●苦とは、此身は初生の時より常に苦惱を受く、寶積經に説くが如し、若は男、若は女、はじめ生れて地に墮るに、或は手をもて捧げ、或は衣をも

てうけとり、或は冬夏の時に冷熱の風ふるゝに大
 苦惱を受く、長大の後また苦惱多し、同經に説か
 く、此身を受くるに二種の苦あり、所謂眼耳鼻舌
 咽喉牙齒、胸腹手足に諸の病生ずることあり、
 是の如き四百四病其身を逼切するを名けて内苦と
 す、復外苦あり、所謂或は牢獄に在て搯打楚撻ら
 る、或ひは耳鼻をそがれ及び手足をさらる、諸の
 悪鬼神而も其便りを得、復蚊虻蜂等の毒虫のため
 にかまれ、寒熱飢渴風雨並に種々苦惱をいたして
 其身を逼切す、此五陰の身は一々の威儀、行住坐

人生の八苦

臥皆苦ならせといふことなし、苦は長時に暫くも
 休息せざ、是を名けて外苦とす。(往生要集)
 ●苦輪といふは、三界六道みなこれ苦なれども、四
 苦八苦はことに人間にあり、貴賤ことなりといへ
 ども、ことごとくこれをそなへ、貧富おなじから
 ざれども、是になやまされせといふことなし、四
 苦といふは生老病死なり、八苦といふは、これに
 愛別離苦、求不得苦、怨憎會苦、五陰盛苦を加ふ
 むし壯年にして世を早く過ぐる人は老苦をうけざ
 るあり、もし富有にして寶を求むることなからん

死苦

妨ぐ、誰かこの苦をいとはざらん、死苦といふは一期の報命ながくつきて、當生の果報にうつる一刹那なり、水火風の三大各散壞し、壽煙識の三法皆捨離する時、百處支節さうさくがごとし、遂にいさ絶へ眼とぢぬれば、これを野外に送る、花の顔の笑をふくみし、俄に無常の風にさらはれ雲の鬢のなざけありし空しく一夜の煙とのぼりぬ高もいやしきもこの苦のがるところなく、賢さも愚なるもこの悲免ることなし、静に思へば樂むべき所にあらせ、つらく樂せれ老著すべき生

愛別離苦

にあらせ、然にあけてもくれても五欲にまつはれて、我も人も生死をおそるゝことなし。(顯名鈔)
 ● 人世間愛欲の中に在て、獨り生し獨り死し、獨り去り獨り來りて、行に當り苦樂の地に至り趣むく身自ら之をうくるにたれも代る者なし、善惡變化して殃福處異なり、あらかじめ嚴待して當に獨り趣入すべし、遠く他所に到りぬれば能く見る者なし、善惡自然にして行を追ふて生る所なり、窈々冥々として別離久しく長じ、道路同じからせし會ひ見ること期なし、甚難く甚難し、復相値

生苦

人は貧苦を免るゝあり、其外のともがらはこれら
の苦をのがるべからざ。
(存覺法語)

●四苦といふは生老病死なり、生苦といふは生るゝ
時の苦なり、十月の間三百餘日、胎内に處して五
位を經、血肉に交はりて諸苦をうく、月みち期至
りてのち、はじめて生るゝ時、頭をさかしまにし
身をつゝめて出づ、一切の骨節つゝまりてのぶる
こと能はざ、其苦痛によりて前生の事悉く忘る
●老苦といふは、日月速に行きて盛んなる齡早く
すぐ、病は年を逐ひて加はり、形は日に隨ひて衰

老苦

病苦

ふ、鏡にうつる影に向へば、知らぬ翁に逢へるか
と疑ひ、けぬにみてる白髪を數ふれば、けさはさ
のふよりも多し、力弱くして春の柳に似たり、眠
早くさめて夏の夜をのこす、老少ともに不定なれ
ども、老ぬれば已に死に近くこと誠に心細かるべ
し、病苦といふは、人身を成するは地水火風の四
大なり、四大ごとに百一の病あり、合すれば四百
四病なり、一病忽に起れば五体悉くいたむ、病
はこれ苦の極りなり、病は即ち死の因なり、たゞ
身心を憐亂するのみにあらず、亦佛法の修行をも

死苦

妨ぐ、誰かこの苦をいとはざらん、死苦といふは一期の報命ながくつきて、當生の果報にうつる一刹那なり、水火風の三大各散壞し、壽煥識の三法皆捨離する時、百處支節さくがごとし、遂にいさ絶へ眼とぢぬれば、これを野外に送る、花の顔の笑をふくみし、俄に無常の風にさらはれ雲の鬢のなさけありし空しく一夜の煙とのぼりぬ高もいやしきもこの苦のがることなく、賢きも愚なるもこの悲免ることなし、静に思へば樂むべき所にあらせ、つらく楽せれを著すべき生

愛別離苦

にあらせ、然にあけてもくれても五欲にまつはれて、我も人も生死をおそることなし。(顯名鈔)
 ● 人世間愛欲の中に在て、獨り生し獨り死し、獨り去り獨り來りて、行に當り苦樂の地に至り趣むく身自ら之をうくるにたれも代る者なし、善惡變化して殃福處異なり、あらかじめ嚴待して當に獨り趣入すべし、遠く他所に到りぬれば能く見る者なし、善惡自然にして行を追ふて生るる所なり、窈々冥々として別離久しく長じ、道路同じからせし會ひ見ること期なし、甚難く甚難し、復相値

求不得苦

ふことを得んや。

(無量壽經)

●當にまた求索すれども時に得ること能はず、思想して益なし、身心ともに勞れて坐起安からず。

(無量壽經)

怨憎會苦

●或時は心に諍ひて忿怒する所あり、今世の恨の意微し相憎嫉すれば、後世には轉たはげしく大怨となるに至る、所以は云何となれば、世間の事更わひ患害す、即時に急に相破すべからずと雖も、然も毒を含み怒を蓄ひ、憤を精神に結びて、自然に剋識して相離ることを得ず、皆當に對生し

憂悲懼苦

て更わひ報復すべし。

(無量壽經)

●尊もなく卑もなし、貧もなく富もなし、少長男女共に錢財を憂ふ、有無同然なり、憂思まことに等し屏營愁苦して念を累ね、慮をつみて、心のためには走せ使ひて安き時あることなし、田あれば田を憂ふ、宅あれば宅を憂ふ、牛馬六畜、奴婢錢財、衣食什物復共に之を憂ふ、思をかさね息をつみて憂念りて愁怖す、或時は室家父子、兄弟夫婦、ひとり死す、ひとりは生ぜ、かはるく相哀愍す、恩愛思慕して憂念結縛す。

(無量壽經)

●尊貴豪富も亦この患あり、憂懼萬端にして勤苦かくのごとし、もろくの寒熱を結びて痛と共に居す。
(無量壽經)

●凡そ三界安きことなし、なをし火宅のごとし、衆苦充滿して甚だ怖畏すべしと、佛ときたまへば、何れの境か煩惱の火宅にあらざらん、誰の輩か生死の衆苦をうけざるべき、苦をうけながら迷ひて樂とおもひ、さどら老厭はざるは愚夫のならひなれども一分も因果のことはりを辨へ、まして後世を願はん類、この苦因の制しがたきことを知り、

人身を得る
こと難し

其苦果を免るまじきことを思ひて、自力にてはなるまじき生死の根源をたゝんことは、ひとへに他力をすてたすけたもふ如來の恩徳なりと仰ぐべきなり。
(存覺法語)

●無量生死の中には人身を得ること甚だ難し、よし人身を得れども諸根を具すること亦難し、たとひ諸根を具すとも佛敎に遇ふこと亦難し、たとひ佛敎に遇ふとも信心を生ずること亦難し、故に大經に云く、人趣に生る者は爪の上の土の如し、三塗に墮するもの十方の土の如し、法華經に云く、無

量無數劫に是の法を聞くこと亦難し、能く是の法をさく者、此人亦復難し、而るを今まさに此等の縁を具す、當に知るべし、苦海を離れて淨土に往生すべしとは、只今生にあり、而も我等頭へには霜雪を載せて心俗塵に染み、一生盡きぬと雖も希望は盡き盡き、遂に白日の下を辭して、獨り黃泉の底に入らむとき、多百踰繕那の銅燃猛火中に墮して、天を呼び地を叩くと雖も更に何の益かあらん願は諸の行者疾く厭離の心を生し、速に出要の路に隨がへ、寶の山に入て手を空しくして歸ること

となかれ。

(往生要集)

● 私におもんみれば人身受けがたく佛教あひがたし然るに今片州なれども人身をうけ、末代なれども佛教にあへり、生死を離れて佛果に至らんこと今正しくこれ時なり、このたびつとめをきて、もし三途にかへりなば、誠に寶の山に入りて手を空しくして歸らんがごとし。

第三項 罪 惡

● 未來世の一切の衆生は、煩惱の賊の害する所となる。

(觀無量壽經)

劫濁のどきうつるには、有情やうやく身小なり、
五濁悪邪まざるゆへ、毒蛇悪龍のどとくなる。

(和讃)

三毒

三毒といふは、貪欲、瞋恚、愚痴なり、貪欲といふは色に著し實にふけるこころなり、瞋恚といふは怒をなし腹を立つるこころなり、愚痴といふは無明におほはれ正理に惑ひぬる心なり、貪欲を生じ、瞋恚を起すこども、其源を尋ねれば皆愚痴より出たり、八萬の塵勞さまざまにわかれ、一切の煩惱其數多けれども、根本を尋ねるに皆三毒よ

貪欲の相

り生ぜり、もし人毒をくひぬれば必死するが如く、この三の煩惱を起せば必三塗に趣くが故に三毒と名く、又之を名けて三縛ともいふ、有情を結縛して生死をいたさるがゆへなり。(顯名鈔)
凡夫といふは、無明煩惱我等が身にみちみて欲も多く、怒りはらだち、そねみねたむ心多く、ひまなくして臨終の一念にいたるまで止まらざり、さえぞたえぞと水火二河のたどへにあらはれたり。

(一念多念證文)

此劇惡極苦の中に於て、身の營務を勤めて以て自

ら給濟す、貧もなく卑もなし、貧もなく富もなし
少長男女共に錢財を憂ふ、有無同然なり、憂思ま
さに等し、屏營愁苦して念をかさね、慮を積みて
心のために走せ使ひて、安き時あることなし。

(無量壽經)

●或時は室家知識、郷黨市里、愚民野人、うたゝと
もに事に従ひて更に相利害す、忿怒結となり、有
に富みて慳惜す、あへて、施與せざ、愛寶貪重にし
て心苦しくす。

(無量壽經)

●中に不善の人ありて常に邪惡を抱けり、たゞ姪姪

瞋恚の相

を念ひて煩ひ胸の中に満てり、愛欲交亂して坐起
安からざ、貪意守惜して但た唐らに得んことを欲
ふ。

(無量壽經)

●無明煩惱しげくして、塵敷のごとく遍満す、愛憎
違順することは、高峰岳山にことならざ。(和讃)

●或時には心に諍ひて悲怒する所あり、今世の恨の
意すこし相憎嫉すれば、後世には轉たはげしく大
怨となるに至る。

(無量壽經)

●有情の邪見熾盛にて、叢棘刺のごとくなり、念
佛の信者を疑謗して、破壊瞋毒さかりなり。(和讃)

愚痴の相

●世人善をなして善を得、道をなして道を得ることを信ぜせ、人死してかへりて生れ、惠施して福を得ることを信ぜせ、善惡の事すべて之を信ぜせ、これを然らせと謂へり、終に是することあることなし、たゞ此を坐する故に、且つ自らこれを見れば、更におひ瞻視して先後同く然なり、轉た相承受するに教令を父餘す、先人祖父もとより善をなせ、道德を識らせ、身愚かに神聞く、心塞り意どちて、死生の趣、善惡の道自ら見ること能はせ、語る者あることなし、吉凶禍福をこひて各

之をなす、ひとりも怪む者なきなり。(無量壽經)

●世間の人民心愚にして智少し、善を見ては憎謗し慕ひ及ぶことを思はせ、但し惡をなさんと欲ふて妄りに非法をなす。(無量壽經)

●うちまかせて、凡夫のありさまにかはりめあるべからせ、往生の一大事をば如來にまかせたてまつり、今生の身のふるまひ、心のむげやう、口に云こと、貪瞋痴の三毒を根として、殺生等の十惡、穢身のあらん程は、たちがたく伏しがたきによりて、これをはなることあるべからざれば、中々

おろかにつたなけなる煩惱成就の凡夫にて、たゞ
かりにかざるどころなきすがたにてはんべらんこ
そ、淨土真宗の本願の正機たるべけれとおはせあ
りき。
(口傳鈔)

五欲

●衆生散動して識猿猴よりも劇し、心六塵に遍して
しばらくも息ふに由なし。
(散善義)

●五欲といふは色聲香味觸の境界なり、この五欲に
於て想念し、趣向し、貪著して、悪業を現在にた
くはへ、苦報を來世にうくるなり、まづ五欲を想
念すと云は、人ごとに心を欲境にかけて、世をわ

たるはかりことをめくらし、とかく思惟し、さま
ぐに憶念するなり、次に五欲に趣向すと云は、
思惟しおほり、案じゝたためてのち、正しく手を
おろしてその業をなすなり、朝には霜をはらひて
君につかへ、夕には星をいたゞきて私にかへる、
これみな名聞のために馳走し、利養のために辛苦
す、或は江海に船をうかべて商賣を能とし、或は
山野にひつめをかりて殺生をこととす、是の如く
營み走ること、たゞ一期の身命をたすけんがため
なり、若し其志をどげざるとせば、身心をなや

我等には眞實の心なし

ますこと、毒の箭の胸にあたるがごとし、これ五欲に趣向するありさまなり、次に五欲に貪着すと云は、すでに其境界をえてのち之を受用し、之に愛着するなり、金銀の寶を前にとりならべ、五穀の貯を藏につみみて、これをもて妻子をはぐみ、これに於て飽足することなし。(顯名鈔)

●一切の群生海は無始より己來、乃至今日今時に至まで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虛假誑偽にして眞實の心なし。(教行證文類)

●今この世を、如來のみのりに末法惡世とさだめた

まへるは、一切有情まことの心なくして、師長を輕慢し、父母に孝せず、朋友に信なくして、惡をのみこのむゆへに、世間出世みな心口各異言念無實なりとおしへたまへり、世をすつるも、名の心利の心を先とするゆへなり、しかれば善人にもあらせ、賢人にもあらせ、精進の心もなし、懈怠の心のみにして、内は空しくいつはりかさり、へつらう心のみ常にして、誠なることろなき身とするべし。

(唯信鈔文意)

第四項 業報

善惡の業因によりて福福の果報を受く

●天地の間には五道分明なり、恢廓窈窕として浩浩茫茫たり、善惡報應し禍福相うけて、身自ら之をうく、誰も代るものなし、數の自然なるなり、其所行にしたがひて、殃咎命を追ふて縦捨を得ることなし、善人は善を行して、樂より樂に入り、明より明に入る、惡人は惡を行じて、苦より苦に入り、冥より冥に入る。

(無量壽經)

●善惡禍福命を追いて生ずる所なり、或は樂所にあたり、或は苦毒に入る、然る後にして悔ゆとも、當にまた何を及ぶべき。

(無量壽經)

●惡逆無道にして後ち殃罰を受く、自然に趣向して神明記識す、犯せる者を許さず、故に貧窮下賤、乞匄孤獨、聾盲瘖瘂、愚癡弊惡のものあり、疋狂不逮の屬あるに至る、又尊貴豪富、高才明達なるあり、皆宿世に慈孝ありて、善を修し徳を積みて致す所なるに由りてなり。

(無量壽經)

●人世間愛欲の中に在りて、獨り生じ獨り死し、獨り去り獨り來りて、行に當り苦樂の地に至り趣むく、身自ら之をうくるに代るものなし。

(無量壽經)

●衆生もろくの邪業繋につながれて、三界の牢獄にとらはれ、よろづの果縛にかゝはりて、生死を解脱すること能はず、業愛癡の繩人をしばりて送れば、我等いかでか獄卒の呵責をまぬがれん、業風の吹くに随ひて苦の中に落つれば、罪人なんぞ泥梨の苦にもれん、或は悪口兩舌貪瞋慢、八萬の地獄に皆周遍すともいひ、或は他人三寶のどがを論説すれば、死して拔舌泥梨の中に入るともいへり。

(存覺法語)

●閻羅常に彼罪人に告ぐ、少罪だも我能く加ふるこ

と有ることなし、汝自ら罪をなして、今自來る業報自ら招けば代るものなく、父母妻子も能く救ふことなし、唯まさに出離の因を勤修すべし、この故にまさに枷鎖の業をすて、善く遠離を知り安樂を求むべし。

(往生要集)

第五項 輪廻

生死輪廻

●其前世に道徳を信せず、善本を修せざるによりて今復悪をつくれれば、天神剋識して其名籍を別つ、壽終り神逝いて惡道に下り入る、故に自然の三塗無量の苦惱あり、其中に展轉して世々累劫に出

る期あることなし、解脱を得がたし。(無量壽經)

●十方六道同く此れ輪廻して際なし、循々として愛波に沈む、而して苦海に沈す。(教行證文類)

●三界を見るに、是れ虚偽の相、これ輪轉の相、これ無窮の相、尺蠖の循環するが如く、蠶繭の自縛するが如し、哀なる哉、衆生此三界に締して顛倒不淨なり。(往生論註)

●薄地の凡夫業惑に纏縛せられて、五道に流轉せること百千萬劫なり。(愚弄鈔)

●大集經の偈に云く、妻子珍寶及び王位も命終に

臨まん時は隨はざるものなり、唯戒及び施、不放逸は今世後世の伴侶となるど、是の如んば展轉して悪を作り苦を受け、徒らに生じ徒らに死して輪轉際なけん、經の偈に云が如し、一人一劫の中に受くる所の諸の身骨常に積んで、腐敗せざんば毗布羅山の如しと、一劫すら尙ほ爾り、況や無量劫をや我等未だ、曾て道を修せざ、故に徒に無量劫を経たり、今もし勤修せざんば未來亦然るべし。(往生要集)

●これらの三業の罪どがは、多生の間にも悉くこ

れを犯し、かくの如の一切の惑障は今世にも皆之を具せり、染淨の因にこたへて、善惡の果をうるならば、垢障覆深の凡夫何によりてか輪廻の果報を免るべき、劫曠の流轉も之によれり、未來の沈淪も亦同じかるべし。
(存覺法語)

●輪轉といふは、涅槃の常住をえざれば六道に經歷するなり、無窮といふは、その輪轉の一世にあらざ、二出にあらざ、始もなく果もなきことをあらはすなり、摩訶止觀に善惡輪環すといへるを、弘決に之を釋すとして、善は悲想に通じ、惡は無間

にさはまる、昇りて又沈む、故に名けて輪とす、始もなく際もなし、之をたとふるに環のごとしといへるこれそのこゝろなり。
(存覺法語)

第六項

誓願の正機

(一)

惡機

●問て曰く、天親菩薩回向章中、普く諸の衆生と共に安樂國に往生せんと言ふは、此れ何等の衆生を共にすることを指すや、答て曰く、王舍城所説の無量壽經を案ざるに、佛阿難に告げたまはく、十方恒河沙の諸佛如來皆共に、無量壽佛の威神功

彌陀救濟の正客は惡機なり

徳不可思議なることを稱嘆へたまふ、有ゆる衆生
 其の名號を聞きて、信心歡喜せんこと乃至一念せ
 ん、心をいたし廻向したまへり、彼國に生れんと
 願ざれば、即ち往生を得て不退轉に住す、唯だ五
 逆と誹謗正法とを除く、此を案じて言へば、一切
 外凡夫人皆往生することを得、又觀無量壽經の
 如きは九品の往生あり、此經を以て證するに、明
 に知りぬ下品の凡夫たゞ正法を誹謗せざして、信
 佛の因縁をもて、皆往生することを得せしむ。

(往生論註)

問て曰く上來返對の義如何んが知ることを得る、
 世尊定んで凡夫の爲めにして、聖人のためにせざ
 どいふは未だ審かし、直ちに人情を以て義に準せ
 るか、はた亦聖教ありて來證するや、答曰く衆
 生垢重くして智慧淺近なり、聖意弘深し、豈寧ろ
 自らたやすくせんや、今一々に悉く佛説を取て
 以て明證せん、此の證の中に就て即ち其の十句あ
 り、上來十句の不同ありと雖も、如來此十六觀の
 法を説きたまふは、但だ常没の衆生のためにして
 大小の聖人のためにせざといふことを證明す、斯

文を以て證するに豈に是れ謬りあらんや。

(支義分)

●諸佛の大悲は苦者に於てす、心偏へに常没の衆生を愍念したまふ、是を以て勸めて淨土に歸せしむ亦水に溺れたる人の如きは急に須らく偏に救ふべし、岸上のものをば何をもてか濟ふことをせん

(支義分)

●釋迦の出現は五濁の凡夫を度せんがためなり、即ち慈悲を以て、十惡の因の三塗の苦をうくることを開示し、又平等の智慧を以て、人天回して彌陀

佛國に生ぜることを悟入せしむ。

(觀念法門)

●大經に曰く、如來の智慧海は深廣にして涯底なしと、蓋し此意たるや、慈悲深重にして惡機を救度ふ、故に説て深となす、利益廣大にして普く群機に被ふらしむ、故に説て廣となす。(六要鈔會本)

●元曉の遊心安樂道に云く、淨土宗の意は本と凡夫の爲めにして兼て聖人の爲めにす。(選擇集)

●うちまかせて、凡夫のありさまにかはりめあるべからせ、往生の一大事をば如來にまかせたてまつり、今生の身のふるまひ、こころのむけやう、口

にいふこと、貪瞋痴の三毒を根として、殺生等の十惡、穢身のあらんはどはたちがたく、伏しがたきによりて、これをはなることあるべからざれば、なかくをろかに拙なげなる煩惱成就の凡夫にて、たゞかりにかさるところなきすがたにてはんべらんこそ、淨土眞宗の本願の正機たるべけれど、まさしくおはせありき。
(口傳鈔)

●如來の本願はもと凡夫のためにして聖人のためにあらざる事。世の人つねにおもへらく、惡人なをもて往生すいはんや善人をやと、このことごとく

は彌陀の本願にそむき、ちかくば釋尊出世の金言にたがへり、其故は五劫思惟の苦勞、六度萬行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり、またく聖人のためにあらざ、しかれば凡夫本願に乗じて報土に往生すべき正機なり、凡夫もし往生かたかるべくば願虚設かるべし、力徒然なるへし、然るに力願あひ加して、十方衆生のために大饒益を成す、しかれば御釋にも一切善惡の凡夫生ずることを得る者とのたまへり、これも惡凡夫を本として善凡夫をかたはらにかねたり、かるがゆへに傍機

たる善凡夫ぜんぼんぶなを往生わうじやうせば、もはら正機しやうきたる悪凡夫あくぼんぶいかでか往生わうじやうせざらん、しかれば善人ぜんにんなをもて往生わうじやうす、いかにいはんや悪人あくにんをやといふべし。

(口傳鈔)

●根機こんきつたなしとて卑下ひげすべからせ、佛ぶつに下根げこんをすくふ大悲だいひあり、行業ぎやうごうおろそかなりとてうたがふべからせ、經きやうに乃至あいにし一念いちねんの文もんあり、佛語ぶつごに虚妄いつはりなし本願ほんがんあにあやまりあらんや。

(執持鈔)

●一念いちねんなを得生とくしやうの業ごうなり、いはんや多念たねんをや、五逆ごぎやくむねと正機しやうきなり、いはんや輕罪けいざいのひとをや。

(古德傳)

●衆生しゆじやうにかはりて願行ぐわんぎやうを成じやうせること、常没じやうぼつの衆生しゆじやうをささとして、善人ぜんにんに及およぶまで、一切衆生いっさいしゆじやうのうへにもおよばざるところあらば、大悲だいひの願滿ぐわんまん足とくすべからせ。

(決定鈔)

●淨土宗じやうとしゆしゆの正意しやういは、機きの善惡ぜんあくに目めをかけて、佛ぶつの攝せふ不攝ふせふをおもんばかることなかれとなり、この耳みみ四し郎らうは至極しごくの罪人ざいにん、惡機あくきの手本てほんといひつべし、今時いまの道俗だうぞくたれのともがらか、これにかはるところあらんや、凡およそこの身みに於おて、うちに三毒さんどくをたへ

ほかに十惡じふあくを行なせ、つくるに強弱きやうじやくありといへども三業さんごうみなこれ造罪ぞうざいなり、をかすに淺深せんじんありといへども一切いっさいことごとくそれ妄惡もうあくなり、しかればたれのともしながら罪惡ざいあく生死しんじの名なをのがれ、いづれの類るいか煩惱ぼんごう成就じゆうじゆの體たいにあらざらん、つくるもつくらざるもみな罪體ざいたいなり、おもふもおもはざるもことごとく妄念もうねんなり、たとひ身心しんくともに起惡きあく造罪ぞうざいなくとも、念佛ねんぶつをたのまきは極樂ごくらくに生なしかたし、たとひ逆謗ぎやくぼう聞提もんたいなりとも願力がんりきに乗のせば往生わうじやううたがひなし、罪業ざいごふの有無うむによるべからざり、本願ほんがんの信不信しんふしんに

あるべきなり、そもくかの耳四郎みみしろうは山賊海賊さんぞくかいぞく強盜たうせう盜放火殺害たうはうくわさつがい、かくのごときの惡行あくぎやうをもて朝夕あさゆふの能のうとし、妻子つさいをたすくるさへとしけり、かゝるものゝそのわざをしつとも、念佛ねんぶつを修しゆし本願ほんがんをたのみける、ことになふともはんべるものかな。

(古德傳)

● 觀佛三昧經くわんぶつさんまいきやうにのたまはく、長者ちやうじやあり、一人いさになんのむすめあり、最後の處分さいごのしよぶんに閻浮檀金えんぷたんがねをあたふ、穢物きたあきものにつゝみて泥どろの中なかにうづみておく、國王群臣こくわうぐんしんをつかはしてうばひとらんとす、この泥どろをばふみゆけ

ともしらせしてかへる、そののちこの女人とりい
 だしてあきなふに、ささよりもなきを富貴になる、
 これはこれたどへなり、國王といふはわが身の心
 王にたどふ、たからといふは諸善にたどふ、群臣
 といふは六賊にたどふ、かの六賊に諸善をうばひ
 とられてたつ方もなきをば、出離の縁なきにたど
 ふ、泥中よりこがねをとりいだして富貴自在にな
 るといふは念佛三昧によりて信心決定しぬれば、
 須臾に安樂の往生をうるにたどふ、穢物につとみ
 て泥中にをくといふは、五濁の凡夫穢惡の女人を

正機とするにたどふるなり。
(決定鈔)

● 願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、
 他力をたのみたてまつる惡人ども、往生の正因な
 り、よて善人だに往生す、まして惡人はどおほせ
 さふらひき。
(歎異鈔)

● ものをとも覺へぬ愚痴なる人なれども、如來の御慈
 悲にて今度の往生は治定とばかり思ひ、外の義は
 かつて知らぬとも、たゞ本願のかたじけなきこと
 わりをよるこび念佛する人を、故法然聖人は本願
 の正機なり、私のはからひなき人なりとよるこび

たまふなり。

(教名集)

● 縦令一^{たごへいち}生造^{しやうぞう}惡^{あく}の、衆生^{しゆじやう}引接^{いんげつ}のためにとて、稱^{しやう}我^が名^な字^じと願^{ねん}じつ、若^{にやく}不生^{ふし}者^{しや}どちかひたり。(和讃)

● 願^{ねん}力^{りき}無窮^{むきゆう}にましますば、罪業^{ざいごふ}深重^{しんじゆう}もおもからせ、佛智^{ぶつち}無邊^{むへん}にましますば、散亂^{さんらん}放逸^{ほういつ}もすてられせ。(和讃)

(和讃)

● 無明^{むみやう}長夜^{ちやうや}の燈炬^{とうこ}なり、智眼^{ちげん}くらしどかなしむな、生死^{しやうじ}大海^{たいかい}の船筏^{せんはつ}なり、罪障^{ざいじやう}おもしどなげかざれ。

(和讃)

● 夫^{それ}阿彌陀^{あみだ}如來^{にょらい}の超世^{しやうせ}の本願^{ほんがん}と申^{まうす}は、末代^{まつたい}濁世^{じやくせ}の造^{ぞう}

惡^{あく}不善^{ぜん}のわれらごとき^{ほんが}の凡夫^{ぼんが}のために、まこしたまへる無上^{むじやう}の誓願^{せいがん}なるがゆへなり。(御文)

● いかやうなる機^きの衆生^{しゆじやう}をすくひたまふぞといふに、三世^{さんぜ}の諸佛^{しよぶつ}にすてられたる、あさましき我等^{われら}凡夫^{ぼんが}女人^{にょにん}を、われひとりすくはんどいふ大願^{だいがん}をおこしたまひて、五劫^{ごこつ}があひだこれを思惟^{しゆい}し、永劫^{えうこつ}があひだこれを修行^{しゆぎやう}して、それ衆生^{しゆじやう}のつみにをいてはいかなる十惡^{じゆあく}五逆^{ごぎやく}謗法^{ぼうぽう}闍提^{せつだい}のどもがらなりといふども、すくはんどちかひましくて、すでに諸佛^{しよぶつ}の悲願^{ひがん}にこそすぐれたまひて、その願成^{がんじやうじ}就^{じゆ}して

阿彌陀如來とはならせたまへるを、すなはち阿彌陀佛とは申なり。
(御文)

(三) 女子

彌陀の救済は女子を先とす

第三十五願に云く、設し我れ佛を得むに、十方世界に其れ女人ありて、我が名字を聞て歡喜信樂し菩提心を發して女身を厭惡ん、命終の後にまた女身とならば正覺を取らじ、義に曰く、乃ち彌陀の本願力によるがゆへに、女人佛の名號を稱すれば、正しく命終の時即ち女身を轉じて男子と成すことを得、彌陀手を攝し、菩薩身を扶けて寶華の上

に坐し、佛に隨ふて往生し、佛の大會に入て無生を證悟す、又一切の女人、若し彌陀の名願力によらざれば、千劫萬劫恒河沙等の劫に、終に女身を轉ずることを得べからず、應に知るべし、今或は道俗ありて云く、女人淨土に生ずることを得ずといふは、此は是れ妄説なり、信ぜべからず。

(觀念法門)

●彌陀の大悲ふかければ、佛智の不思議をあらはして、變成男子の願をたて、女人成佛ちかひたり。

(和讃)

●彌陀の名願みだのなぐわんによらざれば、百千萬劫ひやくせんまんごふすぐれどもいつこのさはりはなれねば、女身にょしんをいかでか轉てんぜんべん。

(和讃)

●おほよそ大經だいきやうの四十八願しじふはちがわんには、まづ女人往生にょにんわうじやうの願ぐわんをたて、別べつしてこれをすくひ、つぎに觀經くわんきやうには韋提希夫人いだいけふにんを正機しやうきとして、これがために念佛往生ねんぶつわうじやうのみちをとき、つゝに阿彌陀經あみだきやうには、善男子善女ぜんなんじぜんにょ人にんどつらねて、念佛ねんぶつの機男女きあんによにわたることをあらはせり、されば如來にょらいの慈悲じひは、總そうじて一切いちぢやうの衆生しゆじやうにかうふらしむれども、ことに女人にょにんをもてささと

し、淨土じやうどの機縁きねんはあまねく十方じつぱうの群類ぐんるいにわたるといへども、もつはら女人にょにんをもて本ほんとせり。

(女人往生問書)

●世よすでに末世まつせなり、これを利益りやくするはことに彌陀みだの本願ほんぐわんなり、機きまた下機げきなり、これを引入いんにふするは淨土じやうどの一門いちもんなり、時ときをはかりて行ぎやうし、分ぶんをかへりみて修しゆすべし、なかんづくに女人にょにんの出離しゆつりはことにこの教けうの肝心かんじんなり、もし無漏むろうの智水ちすいをほとこさざは、いかでか五障ごしやうの垢塵あかちりをすくことあらん、もし名號なごうの梵風ふんぷうをわふがすは、なんぞ三惡さんあくの猛火たけびを

けすべきや、第十八の願だいいちじゅうはちに十方衆生じつぱうしゆじやうといへる、ひ
ろく男女だんなちよにわたるといへども、別べつして女人往生にょにんわうじやうの
願がんをおこしたまへるは、ことに諸佛しよぶつの濟度さいどにもれ
たる重障じゆうしやうをわはれみ、十方じつぱうの淨土じやうどにさらはれたる
極惡ごくあくをたすけんとなり。

(存覺法語)

● 女人にょにんの身みは十方三世じつぱうさんぜの諸佛しよぶつにもすてられたる身みに
て候さぶらふを、阿彌陀如來あみだにょらいなればこそ、かたじけなく
もたすけましく候さぶらへ、そのゆへは女人にょにんの身みはい
かに眞實心しんじつしんになりたりといふとも、うたがひの心こころ
はふかくして、又物またものなんどのいまはしくおもふ心こころ

は、さらさらせがたくおぼえ候さぶらひ。

(御文)

● おほよそ當流たうりゆうの信心しんじんをどるべきをもむきは、まづ
わが身みは女人にょにんなれば、つみふかき五障三從ごしやうさんじゆうとてあ
さましき身みにて、すでに十方じつぱうの如來にょらいも三世さんぜの諸佛しよぶつ
にもすてられたる女人にょにんなりけるを、かたじけなく
も彌陀如來みだにょらいひとり、かゝる機きをすくはんどちかひ
たまひて、すでに四十八願しじゅうはちがわんをこしたまへり、そ
のうち第十八だいいちじゅうはちの願がんをいて、一切いちがいの惡人女人あくにんにょにんをた
すけたまへるうちに、なを女人にょにんはつみふかくうた
がひの心こころふかきによりて、またかさねて第三十五だいいさんじふご

の願になを女人をたすけんといへる願ををこした
まへるなり、かゝる彌陀如來の御苦勞ありつる御
恩の、かたじけなさをよそふかくおもふべきなり。

(御文)

(附) 方便門の機

方便門の機は定機と散機となり
二機とは、一には善機、二には惡機なり、善機に就て二種あり、(又傍正あり)一には定機、二には散機なり、又傍正ありとは、一には菩薩(大小)二には緣覺、三には聲聞辟支等(以上淨土の傍機なり)四には天、五には人等(淨土の正機)なり。

(愚禿鈔)

此願の行信に依て淨土の要門方便權假を顯開す、此要門より正助雜の三行を出す、此正助の中に就て、專修あり、雜修あり、機に就て二種あり、一には定機、二には散機なり。(教行證文類)
方便眞門の誓願に就て、行あり、信あり、機に就て、定あり、散あり。(教行證文類)
眞門の方便に就て、善本あり、徳本あり、復定專心あり、散專心あり、復定散雜心あり、雜心とは大小凡聖一切善惡、各助正間雜の心を以て名號

定散の二機は漸機なり

を稱念す、良に教は頓にして根は漸機なり。

(教行證文類)

第二節

信心

第一項

信心の必要

信心を決得
すること肝
要なり

●壽命は甚だ得難し、佛世亦値ひ難し、人信慧ある
こと難し、若し聞かば精進して求めよ。

(無量壽經)

●大經に云く、人趣に生る者は爪の上の土の如し、
三塗に墮するもの十方の土の如し、法華經に云く
無量無數劫に是の法を聞くこと亦難し、能く此を

さく者、此人亦復難し、而るを今適此等の縁を
具す、當に知るへし、苦海を離れて淨土に往生す
へしとは只今生にあり、而も我等頭べには霜雪を
戴て、心俗塵に染み、一生盡すと雖も希望は盡
き姿、遂に白日の下を辭して獨り黄泉の底に入ら
む時、多百踰繕那の銅燃猛火中に墮して、天を呼
び地を扣くと雖も更に何の益かあらむ、願はくは
諸の行者、疾く厭離の心を生し速に出要の路
に隨がへ、寶の山に入て手を空しくして歸ること
なかれ。

(往生要集)

● 樂邦文類に云く、總官の張掄の云く、佛號甚だ持ち易し、淨土甚だ往き易し、八萬四千の法門この捷徑に如くはなし、たゞ能く清晨俛仰の暇をやめて、遂に永劫不壞の資をなすべし、是れ則ち力を用ふるに甚だ微にして功を收むること乃し盡くること有ことなけん、衆生亦何の苦あれば自らずて、爲ざるや、疇夢幻にして眞に非き、壽夭にして保ち難し、呼吸の頃すなはち是來生なり、一たび人身を失ひつれば萬劫にも此時に復へらば、悟らば佛衆生を如何んがしたまはん、願はくは深

く無常を念じて、徒に後悔を貽すこと勿れ。

(教行證文類)

● 私におもんみれば、人身うけがたく佛教あひがたし、然に今片州なれども人身をうけ、末代なれども佛教にあへり、生死をはなれて佛果に至らんと、今正しく是れ時なり、此たびつとめ盡して、もし三塗にかへりなば、誠に寶の山に入りて手を空しくして歸らんがごとし、なかんづくに無常のかなしみは眼の前にみたり、一人としても誰かのがるべき、三惡の火坑は足の下にあり、佛法を行

世をばいかでか免れん、皆人心を同じくして懇に
佛道を求むへし。
(持名鈔)

●或は鬼畜の報をうけて飢饉殘害の悲をいたく、
是即ち五欲に貪著する罪業のいたす所なり、然る
に世の習ひ人の心、かゝる罪報をはかへりみせ、
貧しきは貧しきにつけて悋望の念たえず、富める
はどめるにつけて染著の心つくることなし、願ふ
も著するも共に妄心あれば、富めるも貧きも皆惡
道におもむく、なげきても餘りあり、これ如何せ
ん、但しもとより欲界の衆生具縛の凡夫なれば、

煩惱を身にそなへたることは、目鼻の生れつきた
るか如し、厭ふともかなふべからせ、ひとへに萬
事をなげすて、忽ちに妻子をふりすてんことも、
末代の機にはかたかるへし、さればたとひ五欲に
まつはるといふとも、たとひ三毒を斷せすといふ
とも、凡夫の速に生死を離れぬべき道を求むべ
きなり、凡そ六趣の中には人身最もうけがたく、
四州の中には南州ごとくにねがふへし。
(顯名鈔)

●今大聖の眞説に據るに、難化の三機、難治の三病
は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば

これを矜哀して治し、斯を憐憫して療したまへり
喩へば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し、濁
世の庶類穢惡の群生、まさに金剛不壞の真心を求
念すべし、本願醍醐の妙薬を執持すべきなり。

(教行證文類)

●極惡深重の衆生は、他の方便さらになし、ひとへ
に彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ。

(和讃)

●末法第五の五百年、この世の一切有情の、如來の
悲願を信せば、出離その期はなかるべし。

(和讃)

●人間は不定のさかひなり、極樂は常住の國なり、
されば不定の人間にあらんよりも常住の極樂をね
がふべきものなり、されば當流には信心のかたを
もてまことせられたる、その故をしらばいたづ
らごとくなり、急ぎて安心決定して淨土の往生をね
がふべきなり。

(御文)

第二項

信心と知識

●田舎卑賤の下輩、一文不通の愚人、佛法の名字を
も聞かざ、因果の道理をもしらで、解脱の術を失

信心を得る
には知識を
要せず

ひ、出離の道に迷へる没々の群生、闇々の衆類に至るまで、佛意豈すてたまはんや、知識にあはせして、空しく人身を失せんこと、かなしむべし

(最須敬重繪詞)

●故法然聖人は、淨土宗の人は愚者になりて往生す候ひしことを、たしかに承り候ひしうへに、物も覺へぬ淺ましき人々の參りたるを御覽じては往生必定すべしとて笑ませたまひしを見參らせ候ひき、文沙汰してさかくしき人の參りたるをば往生いかゝあらんぞらんと、たしかに承はりき

今に至る迄思ひ合せられ候なり。(末燈鈔)

●物をも覺へぬ愚癡なる人なれども、如來の御慈悲にて今度の往生は治定とばかり思ひ、外の義はかつて知らぬども、たゞ本願のかたじけなきことわりを喜び念佛する人を、故法然聖人は本願の正機なり、私のはからひなき人なりとよろこびたまふなり、口かしく經釋の事までさがぐしく沙汰し、我心得がほに申す人をば、往生も如何心もどなしとなんなんぞ仰ごどにて候、たどひ聖教に眼をさらし、いろくなる法門どもを知りた

りども、それにて生死はなれがたく候、たゞ
不思議の願力に乗じ、無智不辨の身なれども、信
心一にて報土往生はとげ候へば、かりそめにも私
の計あるまじく候(教名集)

●聖教をよく覺へたりども、他力の安心をしかど決
定なくばいたづらごととなり、彌陀をたのむ所にて
往生決定と信じて、二心なく臨終までとをり候
はゞ往生すべきなり。(御一代記聞書)

●抑その信心をどらんせるには、さらば智慧もい
らば、才覺もいらば、富貴も貧窮もいらば、善人

も悪人もいらば、男子も女人もいらば、たゞもろ
くの雜行をすて、正行に歸するをもて本意
とす。(御文)

●それ八萬の法藏をしるといふども、後世をしらざ
る人を愚者とす、たとひ一文不知の尼入道なりと
いふども、後世をしるを智者とすといへり、しか
れば當流のところは、あながちにもろくの聖教
をよみ、ものをしりたりといふども、一念の信心
のいはれをしらざる人は、いたづら事なりとしる
べし、されば聖人の御ことばにも、一切の男女た

らん身は、彌陀の本願を信せしめては、ふつとたすかるといふ事あるべからせとおほせられたり。

(御文)

第三項

信心の意義

信心は成佛の眞因なり

● 謹んで往相廻向を案ずるに大信あり、大信心とは即ちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり、斯の心即ち是れ念佛往生の願より出たり。

(教行證文類)

● 設ひ我佛を得むに、十方の衆生、心を至し信樂し

て、我國に生れんと欲ふて乃至十念せむ、若し生れざば正覺を取らじ、唯だ五逆と誹謗正法とを除く。

(無量壽經)

● あらゆる衆生、其名號を聞きて信心歡喜せんと、乃至一念せん、至心に廻向したまへり、彼國に生せん願せれば、即ち往生することを得て不退轉に住せむ、唯だ五逆と誹謗正法とを除く。

(無量壽經)

● 但、信佛の因縁をもて淨土に生せんと願せれば、佛の願力に乗じて彼清淨土にすなはち往生すること

とを得、佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る

(往生論註)

●速に寂靜無爲の樂に入ることば、信心を以て能

(正信念佛偈)

入とす。

●五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、

ながく生死をすてはてし、自然の淨土にいたるな

(和讃)

●不思議の佛智を信ぜるを、報土の因としたまへり

(和讃)

本宗の安心

●設ひ我れ佛を得むに、十方の衆生、心を至し信樂

は大經には三信(三心)としいふ、觀經には三心阿彌經には一心第十願成就の文には信心歡喜乃至一念と説く

して、我國に生れんと欲ふて乃至十念せむ、もし生れざば正覺を取らじ、唯だ五逆と誹謗正法とを

(無量壽經)

●何等をか三とする、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心、三心を具すれば必き彼國に生

(觀無量壽經)

●若し善男子善女人ありて、阿彌陀佛を説くを聞きて、名號を執持すること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心にして亂れざれば、其

人命終ひたむかうじゆうの時に臨のぞみて、阿彌陀佛あみたぶつ諸もろくの聖衆しやうじゆと現げんじて其前そのまへに在まじまさん、この人終ひとまはらん時とき、心顛倒しんてんだうせせして、即すまはち阿彌陀佛あみたぶつの極樂國土ごくらくこくどに往生わうじやうすることを得ねん。

(阿彌陀經)

●あらゆる衆生しゆじやう、其名號そのみやうごうを聞ききて信心歡喜しんじやくわんぎせんと、乃至あいにし一念いちねんせん、至心ししむに廻向まいかうしたまへり、彼國かのくにに生しやうせんと願ねんせれば、即すまはち往生わうじやうすることを得ねて不退轉ふたいてんに住ざうせむ、唯ただた五逆ごぎやくと誹謗正法ひぼうしやうほふとを除のぞく。

(無量壽經)

大經の三倍

●三心さんしんといふは、一ひつには至心ししん、二ふたつには信樂しんげう、三みつには

は即ち一心
なり

欲生よくしやう、私わたくしに字訓じじくんを以もちて論意ろんいをうかゞふに、三さんを合がっして一いちとすべし、其意そのい如何いかとなれば、一ひつには至心ししむ、至しといふは眞しんなり、誠じやうなり、心しむといふは種しゆなり、實じつなり、二ふたつには信樂しんげう、信しんといふは眞しんなり、實じつなり、誠じやうなり、滿まんなり、極ごくなり、成じやうなり、用いづなり、重ぢゆうなり、審しんなり、驗けんなり、樂らくといふは欲よくなり願ねんなり、慶きやうなり、喜きなり、樂らくなり、三みつには欲生よくしやう、欲よくといふは願ねんなり、樂らくなり、覺かくなり、知ちなり、生しやうといふは成じやうなり、興きやうなり、爾しかれば至心ししむは即すまはち是これ誠種眞實じやうしゆしんじつしむの心しむなり、故ゆゑに疑心ぎしんあることなし、信樂しんげう

は即ち是れ眞實誠満の心、極成用重の心、欲願審
 驗の心、慶喜樂の心なり、故に疑心あることなし
 欲生は即ち是れ願樂の心、覺知成興の心なり、故
 に三心皆共に眞實にして疑心なし、疑心なきが故
 に三心即ち一心なり、字訓斯の如し、之を思擇す
 べし、復三心と言ふは、一には至心、この心即ち
 是れ如來至徳圓修満足眞實の心なり、阿彌陀如來
 眞實の功徳を以て一切に廻施したまへり、即ち名
 號を以て至心の体とす、この心は是れ如來の清淨
 廣大の至心なり、是を眞實心と名く、至心は即ち

これ大悲心なり、故に疑心あることなし、二には
 信樂、即ちこれ眞實心を以て信樂の体とす、この
 心は即ちこれ本願圓滿清淨眞實の信樂なり、是
 を信心と名く、信心即ちこれ大悲心なり、故に疑
 蓋あることなし、三には欲生、即ち清淨眞實の
 心を以て欲生の体とす、この心はこれ如來の大悲
 諸有の衆生を招喚したまふの教勅なり、即ち大悲
 の欲生心をもて是を廻向と名く、三心皆是れ大悲
 廻向心なるが故に、清淨眞實にして疑蓋雜るこ
 となし、故に一心なり、之に依て師釋を披きたる

に、云はく西岸上に入ありて喚で言く、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れせ、又のたまはく、中間の白道は即ち貪瞋煩惱の中に能く清淨願往生の心を生ぜるに喩ふるなり、仰て釋迦の發遣を蒙り、又彌陀の招喚したまふによりて、水火の二河を願みせ、彼願力の道に乗せ、是に知ぬ、能生清淨願心はこれ凡夫自力の心に非せ、大悲廻向の心なるが故に清淨願心とのたまへり、爾れば一心正念といふは、正念は即ち是れ稱名、々々は

即ちこれ念佛なり、一心は即ちこれ深心、深心は即ち堅固深心、堅固深心は即ちこれ真心、真心即ちこれ金剛心、金剛心即ちこれ無上心、無上心即ちこれ淳一相續心、淳一相續心即ちこれ大慶喜心なり、大慶喜心を獲ればこの心三不に違す、この心三信に順せ、この心即ち是れ大菩提心、大菩提心即ちこれ眞實信心、眞實信心即ちこれ願作佛心、願作佛心即ちこれ度衆生心、度衆生心即ちこれ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる心なり、この心即ちこれ畢竟平等心、この心即ちこれ大

大經の三心と觀經の三心とは同一なり

悲心、是の心作佛す、是の心是れ佛なり、是を如實修行相應と名づくるなりと、應に知るべし、三心即ち一心の義答へ竟ぬ。
(淨土文類聚鈔)

●又問ふ、大經の三心と觀經の三心と一異如何んぞ、答ふ兩經の三心即ち是れ一なり、何を以てか知ることを得る、宗師の釋にのたまはく、至誠心の中に云く、至といふは眞なり、誠といふは實なり、人に就き行に就きて信を立る中に云く、一心に専ら彌陀の名號を念ざる、是を正定の業と名づく、又のたまはく、深信即ち是れ眞實信心なり

り、廻向發願心の中に云く、此心深信せること由し金剛のごとし、明に知りぬ、一心は是れ信心なり、專念は即ち正業なり、一心の中に至誠廻向の二心を攝在せり、さきの問の中に答へ竟りぬ。
(淨土文類聚鈔)

●又問ふ、已前の二經の三心と小經の執持と一異如何、答ふ、經にのたまはく、名號を執持すと、執は心堅牢にして移らば、持は不散不失に名く、故に不亂といへり、執持は即ち一心、一心は即ち信心なり、然れば則ち執持名號の眞説、一心不亂の

大觀二經の三心と小經の一心と一なり

誠言必之に歸すべし、特に之を仰ぐべし。

(淨土文類聚鈔)

本願の所誓
三心即一心
なるが故に
天親菩薩は
三を合して
一心歸命と
判ぜられた

●世尊我れ一心に、盡十方無碍光如來に歸命したてまつり、安樂國に生せんと願せ。

(淨土論)

●我一心にとは、天親菩薩自督の詞なり、言ふことろは無碍光如來を念じて、安樂國に生せんと願せしむる相續して他想間雜なし。

(往生論註)

●三經の大綱隱顯ありと雖も、一心を能入とす、故に經は始に如是と稱す、論主はしめに一心とのたまへり、即ちこれ如是の義を彰はすなり。

(淨土文類聚鈔)

●問ふ、念佛往生の願に已に三心を發す、論主何を以ての故に一心とのたまふや、答ふ、愚鈍の衆生覺知し易からしめんための故に、論主三を合して一となしたまふか。

(淨土文類聚鈔)

●もろくの雜行雜修自力の心をふりすて、一心に阿彌陀如來、われ等が今度の一大事の後生、御たすけ候へどたのみ申して候。

(改悔文)

●抑その信心をどらんるには、さらに智慧もいらせ、才覺もいらせ、富貴も貧窮もいらせ、善人

蓮師は一心
歸命を和述
して雜行を
すて、正行
に歸せよ自
力をすて、
他力をたの
めと示さま
たり

も悪人あくにんもいらざ、男子おんしも女人にょにんもいらざ、たゞもろくろくの雜行ざうぎやうをすて、正行しやうぎやうに歸かへするをもつて本意ほんいとす、その正行しやうぎやうに歸かへするといふはなにのやうもたなく、彌陀如來みだにょらいを一いち心しん一向いっかうにたのみたてまつる理ことわりばかりなり。
(御文)

●その信心しんじむといふは、大經たいきやうには三信さんしんととき、觀經くわんきやうには三心さんしんといひ、阿彌陀經あみだぎやうには一心いっしんとあらはせり三經さんきやうともはその名なかはりたりといへども、その心こころはたゞ他力たりのちの一心いっしんをあらはせることなり、されば信心しんじむといへるそのすがたは、いかやうなるすが

たぞといへば、まづもろくの雜行ざうぎやうをすて一向いっかうに彌陀如來みだにょらいをたのみたてまつりて、自餘じよの一切いっさいの諸神しよじん諸佛しよぶつ等とうにも心こころをかけず、一心いっしんにもはら彌陀みだに歸命きみやうせば、如來にょらいは光明くわうみやうをもて、その身みを攝せつ取しゆしてすてたまふべからず、これすなはちわれらが一念いちごんの信心しんじむ決定けつじやうしたるすがたなり。
(御文)

●その信心しんじむをどらんせるやうはいかんといふに、それ彌陀如來みだにょらい一佛いっぶつをふかくたのみたてまつりて、自餘じよの諸善しよぜん萬行まんぎやうに心こころをかけず、又また諸神しよじん諸菩薩しよぼさつにをいて、今生こんじやうのいのりをのみなせる心こころをうしない、又また

わろき自力じりきなんといふひがおもひをもなげすて、
彌陀みだを一いつしん心いっしん一向いっかうに信樂しんげうして二心ふたこころなき人ひとを、彌陀みだは
必かならず遍照へんぜつの光明くわうみやうをもつて、その人ひとを攝受せつじゆしてす
てたまはざるものなり。
(御文)

●二ふたつには深じん心しん、深じん心しんといふは即すなはちこれ深ふかく信しんするの
心こころなり、亦また二種ふたしゆあり、一ひとつには、決定けつぢやうして自身じしんは現げん
にこれ罪惡ざいあく生死しやうじの凡夫ぼんぷ曠劫くわうきやく已來いらい常に没もつし常に流轉りうてん
して、出離しゆつりの縁えんあることなしと深信じんしんす、二ふたつには、
決定けつぢやうして彼阿彌陀佛かのあみだぶつし四十八願しよはちじゅうはちがんをもて衆生しゆじやうを攝受せつじゆ
たまふ疑うたがひなく慮をもんばかりなく、彼願力かのがんりきに乗じやうせば、定また

善導大師は
觀經の深心
を釋するに
つき一心の
中に具する
信相を機法
二種に分説
せらまたり

んで往生わうじやうを得うと深信じんしんす。
(散善義)

●煩惱ぼんごう具足ぐそくと信知しんちして、本願力ほんがんりきに乗じやうれば、すなは
ち穢身じゆしんすてはて、法性常樂證ほつしやうじやうらくしやうせしむ。(和讃)

●ふかくかゝるあさましき機きをすくひまします、彌み
陀だ如來にょらいの本願ほんがんなりと信知しんちして、二心ふたこころなく如來にょらいをた
のむこゝろの、ねてもさめても憶念おくねんの心しんつねにし
てわすれざるを、本願ほんがんたのむ決定心けつぢやうしんをえたる信心しんしん
の行人ぎやうにんといふなり。
(御文)

●弘願ぐわんといふは、大經だいきやうに説ごくが如ごとし、一切善惡いちぜんぜんあくの凡ぼん
夫ご生じやうを得うる者もの、皆阿彌陀佛みあみだぶつの大願業力だいがんごふりきに乗じやうるを

信心は他力
廻向なり

増上縁とせざるはなし。

(支義分)

●信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり。(和讃)

第四項

成佛の眞因

●あらゆる衆生、其名號を聞きて、信心歡喜し乃至一念せむ、即ち往生を得て不退轉に住す、唯だ五逆と誹謗正法とを除く。(無量壽經)

●下品の凡夫、但た正法を誹謗せざ、信佛の因縁を以て、皆往生することを得せしむ。(往生論註)

●大經に云く、凡そ淨土に往生せむと欲せば、要ら

信心は往生成佛の眞因なり

す菩提心をおこすを源となすべし、もし能く一たび此心を發せば、無始生死の有淪を傾むく。(安樂集)

●此三心を具し、若し生れまば、此ことばり有ることなし。(安樂集)

●一心に信樂して往生を願求すれば、上一形を盡し下十念を收め、佛の願力に乗じて皆往かざるはなし。(支義分)

●今二尊の意に信順し、水火の二河を願みま、念々に遣ることなく、彼願力の道に乗せば、捨命已後

彼國かのくにに生しやうずることを得う。

(散善義)

●彌陀智願海みだちくわんかいは深廣しんくわうにして涯底かいていなし、名なを聞きて往生わうじやうせんと欲ほつせば、皆みな悉こくく彼國かのくにに到いたる。(往生禮讚)

●當まさに知しるべし、生死しやうじの家いえには疑うたがひを以もちて所止しよしとし、涅槃ねはんの城みやこには信しんを以もちて能入のうにふとす。(選擇集)

●能よく一念喜愛いちねんきあいの心しむを發おこせば、煩惱ぼんごうを斷だんせずして涅槃ねはんを得う。

(正信念佛偈)

●正定しやうぢやうの因いんは唯信心たししんしむのみなり。(正信念佛偈)

(正信念佛偈)

●大信心だいしんしむは則すなはちこれ長生不死ちやうせいふしの神方しんほう、大涅槃だいねはんを證しやうするの眞因しんいんなり。(教行證文類)

(教行證文類)

●涅槃ねはんの眞因しんいんは唯信心たししんしむを以もちてす。

(教行證文類)

●一心いつしむは則すなはち清淨しやうじやう報土ほうつの眞因しんいんなり。

(教行證文類)

●三經さんきやうの大綱顯彰たいかうけんしやう隱密いんみつの義ぎありと雖いへも、信心しんしむを彰あはして能入のうにふとす。

(淨土文類聚鈔)

●眞實信しんじつしんをえたる人ひとは、大願業力だいがんごうりきの故ゆゑに、自然じねんに淨土じやうつの業因ごふいんたがはせして、かの業力ごふりきにひかると故ゆゑにゆきやすく、無上大涅槃むじやうだいねはんにのほるにきはまりなしとのたまへるなり。

(尊號眞像銘文)

●この信心しんじむをうれば等正覺とうしやうかくにいたりて、補處ふしよの彌勒みろくにおなじくて、無上覺むじやうかくをなるべしといへり。

(唯信鈔文意)

● 眞實信心をうれば、實報土にひまると教へたまへるを、淨土眞宗とすとしるべし。(唯信鈔文意)

● 往生淨土の正因は、安心をもて定得すべきよしを釋成せらるゝ條顯然なり。(改邪鈔)

● 淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをひらくとならひさふらう。(歎異鈔)

● 南無阿彌陀佛といへる行体は、往生の正業なり、然れども機に信すると信せざるとの不同あるがゆへに、往生をうるどえざるとの差別あり。

(持名鈔)

● 他力眞實の行人は、第十八願の信心をえて、第一の必至滅度の願の果をうるなり。(眞要鈔)

(和讃)

● 安樂佛國にいたるには、無上寶珠の名號を、眞實信心ひとつにて、無別道故ととさたまふ。(和讃)

● 五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心はかりにて、ながく生死をすてはてし、自然の淨土にいたるなれ。(和讃)

●諸佛方便しよぶつほうべんとさいたり、源空げんくうひじりとしめしつゝ、無上むじやうの信心しんじむをしへてぞ、涅槃ねはんのかたをばひらきける。
(和讃)

●一心いっしん一向いっかうに如來にょらいをたのみまいらする信心しんじむひとつにて、極樂ごくらくに往生わうじやうすべし。
(御文)

●それ他方たうきの信心しんじむといふは、なにの要やうをといへば、かゝるあさましき我等われらごときの凡夫ぼんぷの身みが、たやすく淨土じやうとへまいるべき用意よういなり。
(御文)

●信心しんじむ決定けつじやうありて、我人われひと一同いっどうに往生わうじやう極樂ごくらくの本意ほんいとどげたまふべきものなり。
(御文)

●されば一念いちねん歸命きみやうの信心しんじむ決定けつじやうせしめたらん人は、必かならまみな報土ほうとに往生わうじやうすべきこと、さらにもてそのうたがひあるべからず。
(御文)

●聖人しやうにん一流いっしゅうの御勸化ごくわんげのおもむきは、信心しんじむをもて本ほんとせられ候まうらふ、そのゆへは、もろくの雜行ざうぎやうをなげすて、一心いっしんに彌陀みだに歸命きみやうすれば、不可ふか思議しぎの願ねん力りきとして、佛ぶつのかたより往生わうじやうは治定ぢぢやうせしめたまふ
(御文)

第五項

(一) 信心しんじむ教示けうじの左右さいう
信受しんじゆ本願ほんぐわんの教示けうじ

第十八の念
佛往生の本
願を信ずへ
しこいへる
教示

●設たごひ我わが佛ぶつを得ねむに、十じゅう方ほう衆しゆ生じやう、心しんを至いたし信しん樂げうして
我わが國くにに生うれんと欲ぞふて乃な至あ十じゅう念ねんせん、もし生うまれ
ば、正しやう覺かくを取とらじ、唯ただ五ご逆ぎやくと正しやう法ぽうを誹ひ謗ぼうせんをば
除のぞく。
(無量壽經)

●彌みだ陀だ佛ぶつの本ほん願げんを憶おく念ねんすれば、自じ然ねんに即そく時じに必ひつ定ぢやうに
入いる。
(正信念佛偈)

●本ほん願げん大だい智ち海かいに開かい入にふすれば、行ぎやう者じや正しやうしく金こん剛かう心しんを受う
く。
(正信念佛偈)

●親しん戀らんにをさては、たい念ねん佛ぶつして彌みだ陀だにたすけられ
まいらすべしと、よよき人ひとの仰おほせをかうふりて、信しん

まゐる外ほかに別べつの子こ細さいなきなり。

(歎異鈔)

●誓せい願げんの不思議ふしぎによりて、やすくたもち、となへ易やす
き名な號ごうを案あんじいだし給たまひて、この名な字じをとなへん

ものを、むかへとらんと、御おん約やく束そくあることなれば

まづ彌みだ陀だの大だい悲ひ大だい願げんの、不思議ふしぎにたすけられまい
らせて、生しやう死じをいづべしと信しんじて、念ねん佛ぶつのまふさ

るも、自じのはからひ交まじはらざるが故ゆゑに、本ほん願げんに
相さう應おうして、眞しん實じつ報ほう土どに往わう生じやうするなり。
(歎異鈔)

●念ねん佛ぶつ往わう生じやうと信しんまゐる人ひとは、邊へん地ちの往わう生じやうとてさらはれ
候さふらふらんこと、おほかた心得こころおほがたく候さふらふ、その故ゆゑ

は、彌陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば、極樂へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり、信心ありとも名號をとなへざらんは詮なく候また一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたく候、されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり、詮せるところ、名號をとなふといふとも、他力本願を信せざらんは邊地に生るべし、本願他力をふかく信せんともがら

は、なにごとにかは邊地の往生にて候べき。

(末燈鈔)

● 聖人の禪房にいたり、問ひたてまつりて云く、末代惡世の罪惡のわれら、如何してか生死をはなれはんべるべきやと、聖人こたへてのたまはく、彌陀の名號を稱して淨土に往生する、これをもてその肝腑とするなりと、僧都のいはく、愚案またかくのごとし、信心を決定せんがため、この問をいたすなりと、僧都またとふていはく、念佛のときこころの散亂するをば、如何しはんべるべきやと

聖人答て云く、その條源空も力及ばば、欲界
 散地の凡夫、心の散亂すること、人の眼鼻の生得
 あるが如し、いかにも静めんこと、かなふべから
 ざればこそ、たゞ他力の本願にまかせて、機の堪
 不をおもんはからば、心の散不散を論せば、罪の
 重輕をとはば、行の多少をさだめば、不取正覺の
 誓約虚設ならば、往生もとげまればあるべから
 ばと、ゆるくとあふぎつゝ念佛せんには、すぐ
 べからばとは申し候へ、當世の人皆機教の分齊を
 しらば、佛願の攝持すべきをたのまばして、此身

にてたやすく生死いでがたしと卑下の思をなす、
 實に自力の出離は一大事の因縁なり、しかるに他
 力の願船に乗じぬれば、一念に横超して苦海もの
 ならぬこそ覺へはんべれど、僧都耳をそばたて、
 心をおさめつゝ、抔悦をいだきてかへりたまひに
 けり。
 (古徳傳)

自身の罪重ければ、無智なれば、佛も如何にして
 すぐひたまはんはなど、おもはんは、つやく佛
 の願をしらざる人なり、かゝる罪人をやすくと
 たすけんれうに、おこしたまへる本願の名號をど

なへながら、ちりばかりも疑ふ心あるまじきなり

(古徳傳)

●我心にてもものうるさく、妄念妄相を止めんともた
 したまき、静めがたき悪しき心、亂れちる心をし
 つめんともたしたまき、こらしがたき觀念法
 をこらさんともはげまき、たゞ佛の名願を念ま
 れば、本願かぎりある故に、貪瞋痴の煩惱をた
 へたる身なれども、必き往生すと信じられたればこそ
 心やすけれ、さればこそ易行道とはなづけられたれ。

(後世物語)

●彌陀の誓願の深重なるをもて、かゝる衆生をみち
 びきたまふと信知して、一念もうたがふことゝるな
 かれとすゝめたまへり。

(後世物語)

●如來の誓願を信じて一念の疑心なきときは、いか
 に地獄へおちんとおもふども、彌陀如來の攝取の
 光明に、おさめとられまいらせたらん身は、我
 はからひにて地獄へもおちまして極樂にまいるべ
 き身なるが故なり。

(御文)

●されば聖人の御ことばにも、一切の男女たらん身
 は、彌陀の本願を信せましては、ふつとたすかる

といふことあるべからせとおほせられたり。

(御文)

●阿彌陀如來のおほせられけるやうは、末代の凡夫
 罪業のわれらたらんもの、罪はいかほせふかくと
 も、我を一心にたのまん衆生をば必す救ふべしと
 仰せられたり、かゝる時はいよく阿彌陀佛をふ
 かくたのみまいらせて、極樂に往生すべしとおも
 ひとりて、一向一心に彌陀をたふとせことゝ、う
 たがふ心つゆちりはせもつまじきことなり。

(御文)

三心一心に
就て

●かゝるあさましき罪業にのみ、朝夕まごひぬる我
 等とせきのいたづらものぞ、たすけんと誓ひまし
 ます、彌陀如來の本願にてましますぞと深く信じ
 て、一心にふたごゝろなく、彌陀一佛の悲願にす
 がりて、たすけましますと思ふ心の一念の信まこ
 となれば、必す如來の御たすけにあづかるものな
 り。

(御文)

●大經の三信と、觀經の三心と、阿彌陀經の一心
 と同一なりといへる文、本節第三項信心の意義の
 下見るべし。

●又三種の不相應あり、一には信心淳からせ、若存若亡なるが故に、二には信心一ならせ、決定なきが故に、三には信心相續せせ、餘念間故の故に、此三句展轉相成す、信心淳からざるを以ての故に決定なし、決定なきが故に念相續せせ、亦念ふ可し、相續せざるが故に決定の信を得せ、決定の信を得ざるが故に心淳からせ、此と相違するを如實修行相應と名く、是故に論主建めに我一心とま言へり。

(往生論註)

●不如實修行といへること、鸞師釋してのたまはく

一者信心あつからせ、若存若亡するゆへに、二者信心一ならせ、決定なきゆへなれば、三者信心相續せせ、餘念間故とのべたまふ、三信展轉相成す、行者こゝろをどゞむべし、信心あつからざるゆへに、決定の信なかりけり、決定の信なきゆへに、念相續せざるなり、念相續せざるゆへ、決定の信をえざるなり、決定の信をえざるゆへ、信心不淳とのべたまふ、如實修行相應は信心一に定めたり。

(和讃)

●此三心を具すれば必生ずることを得、若し一心

を少すこけぬれば、即すまち生しやうずることを得わず、觀くわん經きやうに具つぎに説とくが如ごとし。

(往生禮讚)

●南無阿彌陀佛といへる行體ぎやうたいは、往生わうじやうの正業しやうごふなり、然しかれども機きに信しんずると、信しんせざるとの不同ふたふあるがゆへに、往生わうじやうをうるどえざるとの差別しやべつあり、故ゆゑに大經だいきやうには三信さんしんとき、觀經くわんきやうには三心さんしんとしめし、小經せうきやうには一心いっしんとあかせり、これみな信心しんじゆをあらはすことばなり、その信心しんしゆといふは疑うたがひなきをもて信しんとす、いはゆる佛語ぶつごに隨順ずいじゆんしてこれを疑うたがはさ、たゞ師教しけうをまもりてこれに違あせざるなり。

(持名鈔)

●修行者しゆぎやうしやうじん一人あり、問とひたてまつりて云いはく、至誠等しじやうごうの三心さんしんを具ぐしむらふべきやう、如何いかんか思おもひ定めはんべるべきと、聖人しやうじん答こたへてのたまはく、三心さんしんを具ぐすることばたゞ別の様やうなし、阿彌陀佛あみだぶつの本願ほんがんにわが名號みやうごうを稱念しやうねんせば、かならむ引接いんせふせんとおほせられたれば、決定けつぢやうして攝取せつしゆせられたてまつるべしと、深ふかく信しんじて心こころに念ねんじ、口くちに稱しやうするにもうかからせして、すでに往生わうじやうをうちかためたる思おもひをなし、歡喜くわんきのしるしには、南無阿彌陀佛あみだぶつとどとな

へたれば自然に三心具足のいはれあるなり、三心とはたゞ本願を疑はざる一心をいふなり、わづらはしく三の心を外に求むべきにはあらざるなり

(古徳傳)

●善導の釋にいはく、此三心を具すれば必生往生を得、もし一心をかけば即ち生ずることを得と、三心の中に一心かけぬれば、生ずることを得と、いふ、たゞ信心を要とす、其外は願みざるなり、信心決定しぬれば三心自からそなはる、本願を信ずることまことなれば虚假の心なし、淨土をまつ

こと疑なければ、廻向の思あり、この故に三心ことなるに似たれども、みな信心にそなはるなり

(唯信鈔)

●他力の三信といふは、第十八の願に至心信樂欲生我國といへり、これすなはち三信とはいへども、たゞ彌陀をたのむところの行者歸命の一心なり

(御文)

●その信心といふは、大經には三信とて、觀經には三心といひ、阿彌陀經には一心とあらはせり三經どもにその名かはりたりといへども、そのこ

ころはたゞ他力の一心をあらはせるころなり。
(御文)

● 一心にふかく彌陀に歸する心の疑なきを、眞實信心とはまふすなり。
(御文)

(二) 聞信名號の教示

● あらゆる衆生、其名號を聞て信心歡喜せんこと乃至一念せん、心を至し廻向したまへり、彼國に生れんと願せれば、即ち往生をえて不退轉に住す、唯だ五逆と誹謗正法とを除く。
(無量壽經)

● 聞といふは、衆生佛願の生起本末を聞て、疑心

名號の謂を聞て信すへしといへる教示

あることなし、是を聞といふ。
(教行證文類)

● 聞其名號といふ、聞は善知識にあふて、如來の他力をもて、往生治定する道理をきき、さだむる聞なり、同じ經に、其佛の本願の力、名を聞きて往生せむと欲へば、皆彼國に到るともみへたり、またこの經の流通にも其有得聞彼佛名號とあり、宗師の御釋にも、彌陀智願海は深廣にして涯底なし、名を聞て往生せんと欲へば、皆悉く彼國に到ることを得といへり、また祖師聖人の御釋にも、本願の生起本末を聞くべしとみへたり、經釋すで

に聞をもて詮要とせられたり、よくよくとてころにて往生の心行獲得する條顯然なり、しるべし。

(最要鈔)

●聞といふは、如來のちかひの御名を信ぜとまうすなり。

(尊號眞像銘文)

●聞其名號といふは、本願の名號をさくとのたまへるなり、さくといふは、本願をさくとうたがふことろなきを聞といふなり、またさくといふは信心をあらはす御のりなり。

(一念多念證文)

●聞名念我といふは、聞はさくといふ、信心をあら

はすみのりなり、名は如來のちかひの名號なり、念我とまうすはこのみなを憶念せよとなり、諸佛稱名の悲願にあらはせり、憶念といふは、信心まことなる人は、本願をつねにおもひいづることろの、たえまつねなるなり。

(唯信鈔文意)

●その名號をさくといへるは、南無阿彌陀佛の六字の名號を、無名無實にさくにあらざ、善知識にあひて、その教をうけて、この南無阿彌陀佛の名號を、南無とたのめば、かならず阿彌陀佛のたすけたまふといふ道理なり、これを經に信心歡喜と

かれたり。

(御文)

●その名號みやうごうをさくといふは、たゞおはやうにさくに
あらざ、善知識ぜんしきにあひて、南無阿彌陀佛なむあみだぶつの六の字
のいはれを、よくさとひらさぬれば、報土ほうどに往生わうじやう
すべき他力信心たうりきしんじむの道理だうりなりとこそろえられたり。

(御文)

●この信心しんじむといふは、この南無阿彌陀佛なむあみだぶつのいはれを
あらはせるすがたなり。

(御文)

●南無なむとたのむ衆生しゆじやうを、阿彌陀佛あみだぶつのたすけまします
道理だうりなるが故ゆゑに、南無阿彌陀佛なむあみだぶつの六字むくじのすがたは

第十八願の
十念と願成
就の文の一
念との相違
に就て

すなはちわれら一切衆生いっさいしゆじやうの、平等へやうだうにたすかりつる
すがたなりとしらるゝなり、されば他力たうりきの信心しんじむを
うるといふも、これしかしながら南無阿彌陀佛なむあみだぶつの
六字むくじのこそろなり。

(御文)

●されば安心あんじむといふも、信心しんじむといふも、この名號みやうごうの
六字むくじのこそろを、よくくこそろうるものを、他
力たうりきの大信心だいしんじむをえたる人ひととはなづけたり。(御文)

●問とて曰いはく、十八じふはちの願ねんについて、因位いんゐの願ねんには十念じふねん
と願ねんじ、願成就ねんじやうじゆの文もんには一念いちねんとけり、二文にもんの
相違さういいかこそろうべきや、答こたへて曰いはく、因願いんねんの中なか

念じふねんに十念じふねんといへるは、まづ三福等さんぷくどうの諸善しよぜんに對して十念じふねんの往生わうじやうをとり、これ易行いぎやうをあらはすことばなり、然るに成就じやうじゆの文もんに一念いっねんといへるは、易行いぎやうのなかに、なを易行いぎやうをぬらびとるころなり、散機さんきのなかに二種にしゆのしなあり、一ひつには善人ぜんにん、二ふたつには惡人あくにんなり、その善人ぜんにんは三福さんぷくを行ぎやうせし、惡人あくにんはこれを行ぎやうせべからざるがゆへに、それがために十念じふねんの往生わうじやうをどくとところえられたり、しかるにこの惡人あくにんのなかに、また長命短命ちやうめいたんめいの二類にるいあるべし、長命ちやうめいのためには十念じふねんをあたふ、至極短命しごくたんめいの機きのためには

一念いっねんの利生りじやうを成就じやうじゆするなり、これ他力たうりきのなかの他力たうりき、易行いぎやうのなかの易行いぎやうをあらはすなり、一念いっねんの信心しんをさだまるとき、往生わうじやうを證得しやうとくせんことこれその證しやうなり。
 問とふて曰いはく、因願いんげんには十念じふねんととき、成就じやうじゆの文もんには一念いっねんとくとといへども、處々しよしよの解釋げしやくおほく十念じふねんをもて本ほんとす、いはゆる法事讚はふじさんには、上盡一形下じやうじゆいしやうぎやうじゆ至十念しじふねんといひ、禮讚らいさんには稱我名號下至十聲しやうがみやうげしじしやうといへる釋等しやくどうこれなり、したがひて世のつねの念佛ねんぶつの行者ぎやうをみるに、みな十念じふねんをもて行要ぎやうやうとせり、しかる

一念いっねんをもて、なほ易行いぎやうのなかの易行いぎやうなりといふ
 ことおぼつかなし、いかん、答こたへて曰く、處々しこくの解げ
 釋しやく十念じふねんと釋しやくすること、或あるいは因願いんぐわんのなかに十念じふねんと
 きたれば、その文もんによるところえぬれば相違さうゐな
 し、よのつねの行者ぎやうしやの用もちふる所亦ところまたこの義ぎなるべし
 一念いっねんといへるも亦經釋またきやうしやくの明文めいもんなり、いはゆる經
 には、大經だいきやうの成就じゆうじゆの文もん、おなじき下輩げはいの文もん、おな
 じき流通りゆうつうの文等もんどうこれなり、教行證文類けうぎやうしゆうもんるいの第二だいに
 安樂集あんらくしふをひきていはく、十念相續じふねんさうぞくといふは、これ
 聖者しやうしやの一いちの數かずの名なならくのみ、すなはちよく念ねんを

つみ、思おもひをこらして他事たじを縁ゆゑんせざれば、業道成辨ごうだうじやうべん
 せしめてすなはちやみぬ、又またいたはしくこれを頭づ
 數すうをしるさしといへり、十念じふねんといへるは、臨終りんじゆうに
 佛法ぶつぽうにあへる機きについていへることばなり、され
 ば經文きやうもんのあらはなるについて、人多ひたひく之これを用もちふる
 これ即すまはち臨終りんじゆうをささとする故ゆゑとみへたり、平生へいぜいに
 法はふをさして畢命ひつみやうを期ひことせん人ひと、あながちに十念じふねんを
 こととすべからざ、さればとて十念じふねんを非ひずるには
 あらざ、たゞ多おほくも少すくくも力ちからのたへんにしたがひ
 て行ぎやうせべし、必かならずしも數かずを定さだむべきにあらざとな

り、いはんや聖人の釋義のごときは、一念といへるについて、行の一念と信の一念とをわけられたり、いはゆる行の一念とは眞實行のなかにあらはして、行の一念といふは、いはく稱名の遍數について選擇易行の至極を顯開すといひ、信の一念を眞實信のなかにあらはして、信樂に一念あり、一念といふは、これ信樂開發の時剋の極促をあらはし、廣大難思の慶心をあらはすといへり、かみにいふところの十念一念はみな行について論ぜるところなり、信心についていはん時は、たゞ一念

開發の信心をはじめとして、一念の疑心をましへき、念々相續してかの願力の道に乗せるがゆへに名號をもてまたくわが行體とさだむべからざれば十念とも一念ともいふべからず、たゞ他力の不思議をあふぎ、法爾往生の道理にまかすべきなり。

(眞要鈔)

●この一念について隱顯の義あり、顯には十念に對するとき、一念といふは稱名の一念なり、隱には眞因を決了する安心の一念なり、これすなはち相好光明等の功德を觀想する念にあらざ、たゞ

かの如來の名號をきこえて、機教の分限をおもひ
さだむる位をさすなり、されば親鸞聖人はこの一
念を釋すとして、一念といふは、信心を獲得する
時節の、極促をあらはすと判じたまへり。

(眞要鈔)

(三)

一心歸命の教示

一心に歸命
すへしとい
へる教示

世尊我一心に、盡十方無碍光如來に歸命して、安
樂國に生せんと願ふ。

(淨土論)

天親論主は一心に、無碍光に歸命す、本願力に乗
れば、報土にいたるとのべたまふ。

(和讃)

我一心にとは天親菩薩自督の詞なり、言ふところ
は、無碍光如來を念じて安樂國に生せんと願ふ、
心々相續して他相間雜ることなし。

(往生論註)

如實修行相應と名く、この故に論主はじめに我一
心にと言へり。

(往生論註)

三種の不相應あり、一には信心淳からず、若は存
し若は亡ふ 故に、二には信心一あらざ、決定な
きが故に、三には信心相續せざ、謂く餘念間つる
が故に、たがひに相收攝す、若しよく相續すれば
則ちこれ一心なり、但だよく一心なれば即ちこれ

淳心じゆんしんなり、此三心このさんしんを具ぐしてもし生しやうせざば、このことけり有あることなし。
(安樂集)

一心いっしんに信樂しんげうして往生わうじやうを求願ぐわんすれば、上一形かみいちぎやうを盡つくし下十念しもじふねんを收をさむ、佛ぶつの願力がんりきに乗じやうじて皆往みなむかぞといふことなし。
(支義分)

一心いっしんに専もつら彌陀みだの名號みやうごうを念ねんじて、行住坐臥ぎやうぢゆうざがわに時節じせつの久近くこんを問とはせ、念々ねんくに捨すてざる者ものこれを正定しやうぢやうの業ごふと名なづく、彼佛願かのぶつがわんに順じゆんするが故ゆゑに。
(散善義)

一心正念いっしんぢやうねんにして直たうちに來きたれ、我能われよく汝みむがを護まもらん。
(散善義)

一心いっしんといふは、教主世尊けふしよせのみことを二心ふたこゝろなく疑うたがひなしとなり、歸命くゐみやうとまうすは、如來にょらいの勅命ちよくめいにしたがひたてまつるなり。
(尊號眞像銘文)

南無なむはすなはち歸命くゐみやうとまうすことなり、歸命くゐみやうはすなはち釋迦彌陀しやくかみだの二尊にそんの勅命ちよくめいにしたがひ、めしにかなふとまうすことばなり、このゆへに即是すまはちこれ歸命くゐみやうとのたまへり。
(尊號眞像銘文)

一心いっしんとは、彌陀みだをたのめば、如來にょらいの佛心ぶつしんと一ひとつになしたまふがゆへに一心いっしんといへり。
(御一代記問書)

兆載永劫の修行にたへて、御骨をおりけるは、し
 かしながら十方衆生をかけものにして、佛になら
 んど我等がために、廻向せしめたまへる四十八願
 一々に成就して正覺なり、阿彌陀といはれ給事う
 たがひなき上は、たいたのむばかりとまづことろ
 うべし、さてこの廻向にこたへて、信樂の心おこ
 れば、やがて欲生の心發得して、次第に轉入すれ
 ばこそ、三信とも三心ともいはれ、つるにはまた
 一心一念にも落居すなり。
 (真歸繪詞)

●ひとたびも、ほどけをたのむことろこそ、まこと

のよりにかなふみちなれ。
 (御文)

●この本願をたゞ一念無疑に、至心歸命したてまつ
 れば、わづらひもなく、そのとき臨終せば往生治
 定すべし。
 (御文)

●一心にふかく彌陀に歸するところのうたがひなき
 を、眞實信心とは申すなり。
 (御文)

●他力の三信といふは、第十八の願に至心信樂欲生
 我國といへり、これすなはち三信とはいへども、
 たゞ彌陀をたのむところの行者歸命の一心なり
 (御文)

機法二種の
深信といへ
る教示

(四) 二種深信の教示

● 深信といふは、即これ深信の心なり、亦二種あり、一には決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと深信す、二には決定して彼阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を攝受したまふ、疑なく慮なく彼願力に乗せば、定んで往生を得と深信す。(散善義)

● 煩惱具足と信知して、本願力に乗れば、すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ。(和讃)

● 本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ。(和讃)

● 二には深信、即ち是れ眞實の信心なり、自身は是れ煩惱を具足する凡夫、善根薄少にして三界に流轉し、火宅を出でせと信知し、今彌陀の本弘誓願名號を稱すること下至十聲一聲等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知す、乃至一念疑心あることなし、故に深信と名く。(往生禮讚)

● 深信とは謂く深く信するの心なり、當に知るべし生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には

信を以て能入とす、故に今二種の信心を建立して九品の往生を決定する者なり。

(選擇集)

●この深信は他力至極の金剛心、一乘無上の眞實信海なり。

(愚禿鈔)

●深信といふは信心なり、また信心の相をしるべし信心といふは、深く人のことはをたのみて疑はざるなり、のちに百千人のいはむことをば用ゐる、もどきしことをふかくたのむ、これを信心といふなり、いま釋迦の所説を信じ、彌陀の誓願を信じて、一心なきこと亦かくのごとくなるべし、

まこの信心につきて二あり、一にはわがみは罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流轉して出離の縁あることなしと信ぜ、二には、決定してよく阿彌陀佛の四十八願、衆生を攝取したまふことを疑はざれば、かの願力にのりてさだめて往生することをうと信ぜるなり、佛いかに力ましますと知りてか、罪惡の身なればすくわれがたしと思ふべき、五逆の罪人すらなほ十念のこうゆへに、刹那のあひだに往生をどぐ、いはむや罪五逆にいたらせ、功十念にすぎた

らむとや、罪深くばいよく極樂をねがふべし、
 破戒と罪根の深きとを簡ばすといへり。善すくな
 くばますく彌陀を念せべし。三念五念、佛來迎
 とのたまへり、空しく身を卑下して、心を怯弱
 にして佛智不思議をうたがふことなかれ、たゞ信
 心の手をのべて誓願のつなをとるべし、佛力無窮
 なり、罪障深重の身を重しとせせ、佛智無邊なり
 散亂放逸のものをもすつることなし、たゞ信心を
 要とす、その外をばかへりみざるなり。(唯信鈔)

● たゞ我身は極惡深重のあさましきものなれば、地

獄ならではおもむくべき方もなき身なるを、かた
 じけなくも彌陀如來ひとり、たすけんといふ誓願
 をおこしたまへりとふかく信じて、一念歸命の信
 心をこせば、まことに宿善の開發にもよほされ
 て、佛智より他方の信心をあたへたまふがゆへに
 佛心と凡心と一になるところをさして、信心獲得
 の行者とはいふなり。(御文)

● 夫當流の安心のすがたはいかんだなれば、まづ我
 身は十惡五逆五障三從のいたづらものなりと、ふ
 かくおもひつめて、そのうへにおもふべきやうは

かゝる淺ましき機を、本とたすけたまへる、彌陀如來の不思議の本願方なりとふかく信じ奉て、すこしも疑心なければ、必き彌陀は攝取し給べし

(御文)

●たゞ我身はつみ深きあさましきものなりと思ひとりて、かゝる機までもたすけたまへるはどけは、阿彌陀如來ばかりなりとしりて、なにのやうもなく、ひとすぢにこの阿彌陀はどけの御袖に、ひしどすかりまいらする思をなして、後生をたすけたまへどたのみまうせば、阿彌陀如來はふかくよろこ

ひましくて、その御身より八萬四千のおほきなる光明をはなちて、その光明のなかに其人をおさめいれてをきたまふべし。

(御文)

●かゝるあさましき機をすくひまします、彌陀如來の本願なりと信知して、二心なく如來をたのみ。

(御文)

●我身はわろさいたづらものなりと思ひつめて、ふかく如來に歸入する心をもつべし。

(御文)

(五)

二力廢立の教示

●もろくの雜行雜修自力の心をふりすて、一心

自力を廢し

て他力を立
する教示の
總説

に阿彌陀如來、我等か今度の一大事の後生、御た
すけ候へとたのみ申して候、頼む一念の時、往
生一定御たすけ治定とぞんじ。
(改悔文)

●もろくの雜行をこのむ心をすて、或は又物のい
まはしく思ふ心をもすて、一心一向に彌陀をたの
みたてまつりて、そのほか餘の佛菩薩諸神等にも
心をかけせして、たゞひとすぢに彌陀に歸して、
このたびの往生は治定なるべしとおもはゞ、その
ありがたさのあまり、念佛をまらして、彌陀如來
の我等をたすけたまふ御恩を、報じたてまつるべ

きなり。

(御文)

●もろくの雜行を修する心をすて、又諸神諸佛に
追従まうす心をもみなうちすて、さて彌陀如來
と申は、かゝる我らとどきのあさましき女人のた
めに、をこし給へる本願なれば、まことに佛智の
不思議と信じて、我身はわるきいたづらものなり
とおもひつめて、ふかく如來に歸入する心をもつ
べし。
(御文)

●その信心をどらんざるやうは、いかんといふに、
それ彌陀如來一佛をふかくたのみたてまつりて、

自餘じよの諸善しよぜん萬行まんぎやうに心こころをかけぞ、又また諸神しよじん諸菩薩しよぼさつにを
いて、今生こんじやうのいのりをのみなせる心こころをうしない、
又またわろき自力じりきなんといふひがおもひをなげすて、
彌陀みだを一いつし心ひつこ一向いつかうに信樂しんがくして二心ふたこころのなき人ひとを、彌陀みだ
は攝取せつしゆしてすてたまはさるものなり。(御文)

●抑おさ阿彌陀あみだ如來にょらいとたのみたてまつるについて、自
餘よの萬善まんぜん萬行まんぎやうをば、すでに雜行ざつぎやうとなづけてさらへ
る、その心こころはいかぞなれば、それ彌陀佛みだぶつのちか
ひましますやうは、一心いつしん一向いつかうに我われをたのまん衆生しゆじやう
をば、いかなるつみふかき機きなりとも、すくはん

といへる大願だいがんなり、しかれば一心いつしん一向いつかうといふは、
阿彌陀佛あみだぶつにをいて二佛にぶつをならへざる心こころなり、この
故ゆゑに人間にんげんに於おても、まづ主しゆをばひとりならではた
のまぬ道理だうりなり、されば外典げてんのことばにいはいく、
忠臣ちゆうしんは二君にくんにつかへ忠貞ていじん女によは二夫にふをならへまとい
へり、阿彌陀あみだ如來にょらい、三世さんぜ諸佛しよぶつのためには、本師ほんし師し
匠しやうなれば、その師匠ししやうの佛ぶつをたのまんには、いかに
か弟子でしの諸佛しよぶつのこれをよろこびたまはざるべきや
このいはれをもてよくくこころうべし。(御文)
●或時あるときの仰おほせに、たゞ如來にょらい大悲だいひの御惠おんめぐみにより、今度こんどの

往定は一定と思召べく候、自力の行者にこそ、
 我三業をもちよめ、縁にしたがひ餘の佛菩薩をも
 稱念し、餘の善根をも修行して、我身になすこと
 ろの行の功德をつみて、私のはからひの心をも
 ちて、身口意の亂れ心をつくるひ、目出度なして
 この功德を廻して淨土へ生せんとはぎみ候へども
 自力の行にては、なかく本願の正意にそむくゆ
 へにこそ、龍樹菩薩は難易の二道をたて、易行の
 念佛を示し、天親菩薩は十向満位の菩薩なれども
 一念に彌陀佛に歸命し、曇鸞和尚はひとへに他力

の本願をあふぎ、道綽禪師は唯有淨土の一門を示
 し、光明寺の大師は正雜二行を立て、專修の一行
 を教へ、横川の僧都は專雜の得失を判じ、故聖人
 は選擇の本願を惡世にひろめ、淨土の眞門を興起
 して、愚痴にかへりてたゞ一向に念佛せよと示し
 往生の先達となりたまふ、この故に愚禿がすゝむ
 るところ更に私の義にあらせ、疑なく慮
 なければ、彼願力に乗じて定んで往生を得て、
 少しも自力のはからひ、をもんばかりを加へせ、
 一念の疑もなく、佛智にうちまかせたるこそ

他力の信心とはまふすことなり。

(教名集)

● 我身我心のゆるければとて、往生かなふまじき本願にもあらず、もとより我身は煩惱具足せるわろきものなりと思ひとりて、かゝる機までも捨てたまはぬ誓願ぞと、深く信じるをこそ他力の行者とば申すなり、又我心よければとて往生すべしと思ふべからず、自力にては三賢の菩薩だにも、至りがたきは眞實の報土なり、行者各のはからひにては、化土までも往生をどげたまふべきか、唯だ親鸞がすゝむるところは、第十八の他力の信樂を如

専修の得と
雑修の失と
に就て

來の御誓にてうるゆへなり、これを信心といふこの信心といふは他力の一心なり、その他力の一心といふは、雜行雜善の心をはなれたるが、即ち専修專念の金剛の信心なり。

(教名集)

● つぶさに衆行を修して、たゞ能く廻向すれば皆往生を得、何を以てか佛の光普く照すに、唯佛を念ぶる者を攝する、何の意か有る、答て云く、此に三義あり、一には親縁を明す、衆生行を起して、口に常に佛を稱すれば、佛即ち之を聞き、身に常に佛を禮敬すれば、佛即ち之を見たまふ、心

に常に佛を念ざれば、佛即ち之を知りたまふ、衆生佛を憶念すれば、佛亦衆生を憶念したまふ、彼此の三業あひ捨離せざ、故に親縁と名く、二には近縁を明す、衆生佛を見むと願ざれば、佛即ち念に應じて現じて目の前に在ます、故に近縁と名く三には増上縁を明す、衆生稱念すれば即ち多劫の罪を除く、命終らむと欲する時、佛衆と自ら來て迎接したまふ、諸の邪業繫能くさはる者なし、故に増上縁と名く、自餘の衆行はこれ善と名くと雖も、もし念佛に比すれば全く比校にあらざ

(定善義)

●極樂無爲涅槃界なり、隨縁の雜善恐くば生じ難し故に如來要法を選んで、教へて彌陀を念せしむること、專にして復專ならしむ。(法華證)

●釋尊諸行を付屬せざる所以は、即ちこれ彌陀の本願にあらざる故なり、亦念佛を付屬する所以は、即ちこれ彌陀の本願の故なり、今又善導和尚諸行を廢して念佛に歸せしむ所以のもの、即ち彌陀の本願たるの上に、亦これ釋尊付屬の行なればなり故に知りぬ、諸行は機に非して時を失へり、念佛

往生は機に當りて時を得たり、感應豈に唐損ならんや、當に知るべし、隨他の前にはしばらく定散の門を開くと雖も、隨自の後には還て定散の門を閉づ、一び開てのち永く閉ぢざるは、唯これ念佛の一門なり、彌陀の本願、釋尊の付屬意此に在り

(選擇集)

念佛往生の一門は、末代相應の要法、決定往生の正因なり、この門にとりてまた專修雜修の二門あり、專修といふは、たゞ彌陀一佛の悲願に歸し一すぢに稱名念佛の一行をつとめて他事をまじ

へざるなり、雜修といふは、おなじく念佛をまふせども、かねて他の佛菩薩をも念じ、また餘の一切の行業をもくはふるなり、雜修の人の往生しがたきことをいふに、はじめには暫く百のときに一二をゆるし、千の時に五三をあくといへども、後にはつるに千人のなかに一人も行かざと定む。

(持名鈔)

雜行雜修の機をすてやらぬ執心ある人は、必だ化土懈慢國に生るるなり、又專修正行になりきはまるかたの執心ある人は、さだめて報土極樂國に

生しやうをべしとなり、これすなはち専修せんしゆ二修にしゆの淺深せんじんを判はんじたまへることなり、和讃わさんにいはく、報ほうの淨じやう土ちの往生わうじやうは、おほからせとぞあらはせる、化土けちに生うまるゝ衆生しゆじやうをば、すくなからせとおしへたりといへるは、この心こころなりと知しべし。
(正信偈大意)

●念佛往生ねんぶつわうじやうの門もんにつきて、専修せんしゆ雜修じやくしゆの二行にぎやうわかれたり、専修せんしゆといふは、極樂ごくらくをねがふ心こころを起おこし、本願ほんがんをたのみ信しんを起おこすなり、たゞ念佛ねんぶつの一行いちぎやうをつとめて、またく餘行よぎやうをまじへざるなり、雜修じやくしゆといふは念佛ねんぶつをむねとすと雖いへも、又餘またよの行ぎやうをもならべ、他た

の善ぜんともかねたるなり、この二ふたつの中には専修せんしゆをすぐれたりとす、そのゆへは、すでにひとへに極樂ごくらくをねがふ、かの上うへの教主けふしゆを念ねんせむ外ほか、なにのゆへか他事たじをまじへん、電光でんくわう朝露あしたつゆのいのち、芭蕉はしやう泡はう沫まつの身み、僅わずかに一世いつせの勤修つとめをもちて、忽たちまちに五趣ごしゆの古卿こけいをはなれむとす、あにゆるく諸行しよぎやうをかねむや諸佛菩薩しよぶつはつさつの結縁けちねんは隨心ずいしん供佛くぶつのあしたを期きすべし、大小經典だいせうきやうてんの義理ぎりは百法明門ひやくはふめいもんの夕ゆふべをまつべし、一土いちちをねがひ、一佛いちぶつを念ねんざる外ほかは、その用もちあるべからせとなり、たゞちに本願ほんがんに順じゆんせる易行いぎやうの念佛ねんぶつをつ